

# 深谷博治旧蔵文書の研究

荒 船 俊 太 郎

## 【要 旨】

本稿は、早大教授であった故深谷博治氏が所蔵していた史料群の整理作業における中間報告である。第一の課題は、その史料群構造と現在の保存環境に至るまでの来歴を明らかにすることである。第二は、更に一步進めて記録史料学の立場より、研究が立ち遅れている「近代私文書論」の確立へ向け、ケーススタディーとして若干の提言を行おうとするものである。

戦前、深谷氏は『明治天皇紀』編纂に深く関与し、宮内省臨時帝室編修局の編修官補として史料の調査収集、そして執筆に携わった。宮内省退官後も戦中期にかけて春畝公追頒会の『伊藤博文伝』編纂や旧貴族院五十年史編纂掛に所属し、主として史料収集と整理を行い、優れた著作を残した政治史研究者であった。「深谷文書」には、こうした国家事業と言うべき伝記編纂事業で生成された写本史料類が大量に残されている。深谷氏の研究履歴を通じ、かかる史料群の出所と作成年代を詳細に検討することで、現在我々が日常的に研究利用出来る文献史料がいかにして編集されたのかを垣間見ることが出来るだけでなく、戦前期宮内省の一側面や伝記編纂事業の性質をうかがう事が出来るのである。彼が関係した組織ごとに史料を階層化し目録上に配置することで、いかなる史料群構造が浮かび上がるかを重視したのはこのためである。

もとより調査対象とした「深谷文書」は一私文書に過ぎず、そこで明らかとなる史料群構造が他の私文書群の性質と同一の普遍性を持つものではあり得ない。しかし研究手法は勿論のこと、事例研究すらほとんど蓄積のない近代私文書論について、記録史料学が今後どのように向き合い、乗り越えることでその地平を拓いて行くのだろうか。戦後60年を経た現在の私々には、行政文書のみならず私文書をめぐる管理保存・公開プロセスを検討し構築していく事もまた、喫緊の課題であることは論を俟たない。本稿がその議論を喚起する一助となれば幸いである。

## 【目 次】

はじめに

- (一) 課題設定
- (二) 先行研究の整理
- (三) 深谷博治氏の経歴

一 史料群の変遷

二 史料群の特徴

- (一) 史料群の特徴
- (二) 「深谷文書」の全体像

三 シリーズレベルの史料概要

- (一) 「明治天皇紀」

(二) 「伊藤博文伝」

(三) 「貴族院五十年史」

(四) 「神道関係」

(五) 「研究」

(六) 「その他」

終わりに

(一) 史料群構造から見た「深谷文書」の成立経緯

(二) 今後の課題

## はじめに

## (一) 課題設定

「深谷博治旧蔵文書」(以後「深谷文書」と略記)は、早稲田大学文学部教授であった故深谷博治氏(1903~75年、以後敬称略)が生前に収集・筆写した史料群・著書の草稿類である。現在早稲田大学文学部第二研究棟の史学資料室に、段ボール箱に収納の上保管され、同大学の安在邦夫教授が代表して管理してきたものである。旧ゼミ生や明治史研究者の一部には本史料の存在が知られていたが、経年により史料群の成立経緯など、当時の事情を知る人が少なくなっている。深谷の死後、新宿区戸塚町の深谷のアパートからゼミ関係者(由井正臣氏・佐藤能丸氏ら)によって史料群全体は早大に搬送され、学内で転々と場所を変えつつ現在に至っている(後述)。また、故大仏次郎氏が1965年から『天皇の世紀』を執筆し、朝日新聞に連載する際、史料群の一部を同社に貸出したことがあり、その時かなりの史料が改編された。近年では1990年代に望月雅士氏(現:早稲田大学大学史資料センター助手)らにより作業用目録とカード目録が作成された。安在教授より2000年度に真辺将之氏(現:日本学術振興会特別研究員)に整理依頼があり、翌年には筆者にも協力依頼があり、現在真辺氏と共同で各史料の内容を調査した公開用の詳細目録の作成を進めている。今後目録の完成を経て、早稲田大学中央図書館特別資料室(以後、特別資料室と略記)へ移管後に一般公開される予定である。

本稿の課題は、第一にこの史料群の構造と現在の保存環境に至るまでの来歴を明らかにすることである。第二は、更に一步進めて記録史科学の立場より、研究が立ち遅れている「近代私文書論」の確立へ向け、ケーススタディーとして若干の提言を行おうとするものである<sup>1)</sup>。

## (二) 先行研究の整理

次に記録史科学・歴史学双方の研究動向を概観し、研究の意義を確認したい。あらためて述べるまでもなく「深谷文書」は、宮内省などで生成された旧公文書が大半を占めるものの、深谷の公私にわたる活動により生成された私文書である。近年記録史科学研究の進展により、近現代公文書に関しては、国文学研究資料館史料館や各地自治体の文書館・資料館などで整理保存をめぐる実践を踏まえた研究成果が多数公にされ、歴史学研究者の間においても公文書の様式・書式の変遷から近代国家としての日本のあり方を捉え直す試みが行われている<sup>2)</sup>。太政官文書・台湾総督府文書・北海道庁文書(開拓使文書)を事例とした研究はその代表例であろう<sup>3)</sup>。しかし眼を私文書研究に転じると、政治家の個人文書を中心とした近代私文書に関する公開・刊行状況の紹介が散見される程度である<sup>4)</sup>。各種史料集の「解題」は夥しく作成されるものの、その史料(集)の内容紹介や書き手の履歴に関する叙述が中心を占めている。記録史料

1) 本稿は2004年度アーカイブズ・カレッジ修了論文を改訂したものである。

2) 永井和「太政官文書にみる天皇万機親裁の成立」(『京都大学文学部研究紀要』41号 2002年所収)、中野日徹「近代史科学の射程」(弘文堂 2000年)など。

3) 例えば、前掲中野日『近代史科学の射程』、鈴江英一「近現代公文書の史料群構造」(『アーカイブズの科学』下巻 国文学研究資料館史料館編 柏書房 2003年 所収)、同『開拓使文書を読む』(雄山閣 1989年)、同『近現代史料の管理と史料認識』(北海道大学出版会 2002年)、檜山幸夫編『台湾総督府文書の史科学-日本近代公文書学研究序説-』(ゆまに書房 2003年)など。

学的アプローチより史料群の来歴・出所・構造に関する考察を行った近代私文書論は、残念ながら個々の史料のケースについてはほとんど無いといっても過言ではない。ただし研究史をひも解くと、時期を経るにしたがい、そうした機運が次第に醸成され重視されつつあることがうかがえる<sup>5)</sup>。例えば丹羽邦男氏<sup>6)</sup>は、近代日本の私的史料の特徴について「わが国では、戦前の私的文書・記録類は、がいして国家のきわめて強い規制下に作られ、あるいは作ることにしたいを制限された。したがって、文書・記録として残されない、あるいは歪められてしか表現されない重要な歴史的事実が数多く存在する」と指摘している。これは歴史研究の立場からの表明であり、70年代半ばまでの研究動向と史料状況を総括したものであるが、その後段で「理論の枠組みで所与の文書を整理し、論理の無矛盾性を完成するのが作業のすべてとなり、現存文書の全史料群のなかでの位置づけなどの史料批判が抛棄され、歴史的事実の追求が忘れられる」と当時の研究風潮が批判されている。また同論文では、印刷物を重要視し「とくに、書籍が近代人の個性形成に果たす役割を無視して、私家史料整理にさいし、これらを放置し史料目録からも外してしまうなどは論外である」と古文書中心の史料整理方法へ疑問を呈し、地方文書の経営関係資料に含まれる帳簿類について「これまでの研究は多くのばあい〔中略〕帳簿類のみを（しかも意図的に）利用している。しかし、その家の経営を総体として捉えようとするなら、上述の帳簿類が、いかなる意図で作成され、それぞれどのような関連をもっているかを明らかにし、その帳簿組織の体系を把握しなければならない」と主張し、記録史料学において今日では原則化している出所・原秩序を意識し提示していることが注目されよう。

続いて松尾尊允氏は戦前から1990年代前半までの日本近現代史関係史料状況を概観し、敗戦から占領期の史料焼却と押収に関する問題を提起し、更に国立公文書館の開設経過や公文書の公開に関して簡潔な指摘をしている<sup>7)</sup>。また同書には安藤正人氏の論文<sup>8)</sup>が掲載され、歴史学研究者に記録史料学の必要性を幅広く認知させた。松尾論文の後を受け佐々木隆氏により、2004年までの政治史を中心とした近代私文書の史料公開・刊行状況の概観がなされた<sup>9)</sup>。伊藤隆氏は広島大学での講演で、個人文書収集と保存管理システムの構築の重要性を指摘し、個人による収集活動の限界性を主張している<sup>10)</sup>。その他文書館運動と近現代史料に関する『近代文

- 
- 4) 『日本古文書学講座』9～11巻（雄山閣 1979～80年）、特に9巻「近代文書」「公文書Ⅰ～Ⅴ」、明治史に限定されるが『日本近代思想大系 近代史料解説総目次・索引』（岩波書店 1992年）など。
  - 5) 近年の事例として、『歴史学研究』789号（青木書店 2004年6月号）は「特集 アーカイブズの比較史Ⅰ」を組んだほか、同795号（2004年11月号）は「特集 史料論の射程」を組み、歴史を学ぶものが素材として史料とどのように向き合うのかを多面的に考察している。
  - 6) 丹羽邦男「近代史料論」（『岩波講座日本歴史25 別巻2 日本史研究の方法』岩波書店 1976年所収）173、182、191頁
  - 7) 松尾尊允「近現代史料論」（『岩波講座日本通史 別巻3 史料論』岩波書店 1995年所収、松尾『戦後日本への出発』岩波書店 2002年に再録。）
  - 8) 安藤正人「記録史料学とアーキビスト」（前掲『岩波講座日本通史 別巻3』所収）
  - 9) 佐々木隆「近代文書と政治史研究」（『日本の時代史 30 歴史と素材』吉川弘文館 2004年所収）
  - 10) 伊藤隆「個人文書の現状と課題」（『広島大学文書館紀要』7号 2005年所収）また近年伊藤氏は季武嘉也氏と共同して『近現代日本人物史料情報辞典』（1～2巻まで既刊 吉川弘文館 2004～05年）を編纂し、近現代私文書の所在把握を推進している。

書学への展開<sup>11)</sup>などがある。一方こと私文書について言えば、明治政治家の書翰研究として、宛名や文中の表現を仔細に分析した佐々木隆氏の研究を挙げるにとどまる<sup>12)</sup>。

以上これまでの研究において、近現代私文書についてアーカイブズ学的考察を試みた研究は皆無に近い状態であり<sup>13)</sup>、本研究がそうした研究の空白部分に若干なりとも光を当てることになるのではないかと考える。ただし多くの部分で試行錯誤の状態であり、史料整理も未だ端緒段階であることから、基礎的な事実確認や史料紹介を中心とする調査報告にとどまることを予めお断りしておきたい。

### (三) 深谷博治氏の経歴

「深谷文書」の来歴と史料群構造を考察するためには、深谷の生前の足跡をたどる事は不可欠である。そこで以下に簡単な年譜並びに主要著作を付し、併せて氏が関係した公私の組織・研究会を明示する<sup>14)</sup>。

#### (戦前)

- 1903年 1月 福島県に誕生
- 1925年 4月 早大文学部史学科(西洋史)入学
- 1928年 3月 早大卒業 7月宮内省臨時帝室編修局編修官補(編修官渡辺幾治郎を補佐)
- 1929年 6月 明治天皇紀御手許書類調査委員(30年2月まで)
- 10月 明治文化研究会会員
- 1933年 9月 臨時帝室編修局廃止、公刊明治天皇御紀編修委員会書記(38年10月まで)
- 1934年 春 春畝公追頌会『伊藤博文伝』編纂委員
- 1936年 明治政治史研究会に参加(鈴木安蔵ら)
- 1938年 11月 貴族院囑託・貴族院五十年史編纂掛主任(43年まで)
- 近代日本史研究会を組織・以後「近代日本史講座」を刊行(鈴木・田中惣五郎ら)
- 1941年 1月 憲法史研究会(尾佐竹猛・鈴木・伊東治正伯爵らと)

11) 大久保利謙・岩倉規夫編『近代文学への展開』(柏書房 1982年)。他に大久保が中心となってまとめたものに、『近代文書演習』立教大学日本史研究室編(柏書房 1970年)、『演習古文書選 近代編』日本歴史学会編 上下巻(吉川弘文館 1979年)がある。これらの文献も広義の様式論といえよう。

12) 佐々木隆「近代私文書論覚え書-宛名表現にみる政治的關係」(『年報近代日本研究 12 近代日本と情報』山川出版社 1990年所収)、「近代私文書論序説-署名表現に見る政治的關係」(『日本歴史』628号 吉川弘文館 2000年所収)

13) 私文書に言及した数少ない研究事例として、加藤聖文「アーカイブズの編成と記述-近現代史料をめぐる課題(前掲『アーカイブズの科学』下巻 国文学研究資料館史料館編 柏書房 2003年所収)。公文書と私文書の有機的利用を説く、丑木幸男「近現代の組織体と記録-公文書の世界と私文書の世界」(前掲『アーカイブズの科学』上巻 所収)。こうした私文書史料群の構造分析と、目録編成に際しては原島陽一「コレクション史料の目録編成」(『史料の整理と管理』国文学研究資料館史料館編 岩波書店 1986年所収)参照。

14) 「深谷博治教授経歴」(『史観』86-87冊 早稲田大学史学会編 1973年所収)、「深谷博治先生を悼む」(『史観』93冊 1976年所収)より。

早大文学部講師（43年10月まで）

1943年 8月 外務省嘱託（46年 8月まで）・日本外交史研究会結成（清沢洌ら）・時局研究会（馬場恒吾ら）・鎌倉極楽寺懇話会メンバー

（戦後）

1945年10月 早大文学部講師

1947年 文部省教科書編纂委員

1948年 早大附属第二高等学院本属兼文学部講師・大隈研究室主任

1949年 早大文学部本属専任講師

1952年 同助教授

1955年 同教授（73年まで）

1975年 死去

〈主要著作〉

1940年 『初期議會・條約改正』白揚社

1940年 『日清戦争と陸奥外交』日本放送出版協会

1941年 『華士族秩禄処分の研究』高山書院

（44年亜細亜書房 増補改訂・73年吉川弘文館 新訂）

1968年 『写真図説明治天皇』講談社、『明治日本の対韓政策』友邦協会

〈共編・共著〉

1928～38年 『明治天皇紀』（のち吉川弘文館より刊行、全13巻 1968～77年）

1940年 『伊藤博文伝』（全3巻）、『概観明治史』日本放送協会（ラジオ新書）

戦後 早大テキストなど共同執筆。

史料群の大半は戦前のものであり、この年譜からもうかがえるように、公的には早大卒業後入省した宮内省における臨時帝室編修局編修官補、並びに公刊明治天皇御紀編修委員会書記（1928～38年）と旧貴族院五十年史編纂掛主任（1938～43年）、続く外務省嘱託（1943～46年）、早大（1947～73年）が残された史料の出所を考える上で重要である。他方、公務と重複しながら私的には各種研究会・伝記編纂業務に積極的に従事している。春畝公追頌会による『伊藤博文伝』の編纂委員（1934～40年）がこのうち最大のもので、続く1941年からの憲法史研究会における活動も見逃せない。宮内省入省早々、吉野作造が指導する明治文化研究会にも参加している。この活動で知遇を得た、尾佐竹猛や鈴木安蔵らとの交流が戦前の深谷の研究生活を強く規定し、以下で扱う史料群構造を把握・推定する際に大きな意味を持つのである。

一 史料群の変遷

本文書群は筆写史料を中心とする511点の史料群である。現存する写本文書の他に夥しい蔵書史料があったものと推測される。しかし現在では早大文学部史学資料室に数箱、早大中央図

書館、文学部戸山図書館、文学部の日本史学専修室配架などに氏の署名や書き込み・旧蔵書印の入った図書類が散見される程度であり、生前の蔵書を含めた史料群の全体像を把握・復元することは事実上不可能である。朝日新聞社への貸出し分は73年に返還されたが、翌々年深谷が死去したため、由井正臣元早大教授やかつてのゼミ生たちにより、旧蔵書を含む残された史料群全体が早大に搬送された。この時点(70年代後半)を現存する「深谷文書」の成立と考える。由井氏によると、史料群の移管については文学部図書館が仲介して行われたようである。由井氏が整理した際、「深谷文書」は早大文学部第一研究棟8、9階の文学部史学科と考古学科倉庫に収納されていた。由井氏と鹿野政直元早大教授が相談し、特注書棚を用意して保管に供したということである。その後由井氏が整理調査を進めていた「渡辺幾治郎氏旧蔵文書」、すなわち深谷の宮内省時代の上司で晩年は早大で大隈文書整理に従事した故渡辺幾治郎氏(1878～1960年)が収集した史料群(渡辺幾治郎収集謄写明治史資料、現：特別資料室所蔵。以後「渡辺文書」と略記)も「深谷文書」と同様に一括保管(実態は廊下に山積み)していた。その後「渡辺文書」は早大社会科学研究所に移管され、整理が続けられた。整理を終えた「渡辺文書」の一部は由井教授の手により早大図書館(後特別資料室)へ移された。97年社会科学研究所の廃止に伴い、「渡辺文書」の残り「稿本伊藤家文書」「稿本岩倉家文書」は98年に特別資料室へ移管され、現在の保存環境が整うのである<sup>15)</sup>。他方「深谷文書」は文学部に残され、第二研究棟の竣工と共に6階の安在研究室、ついで1階の史学資料室に移管された。そこで先に触れたように、80年代末から95年頃にかけて望月氏らが整理を行ったのである。更に安在教授・望月氏が99年～2000年に、「深谷文書」中の「佐佐木日記」を復刻する<sup>16)</sup>。2001年からは真辺氏と筆者による現在の整理作業を迎えるのである。以上が早大への搬入後の「深谷文書」を取り巻く保管状況である。

- 
- 15) 早稲田大学社会科学研究所編『早稲田大学社会科学研究所所蔵 明治維新関係文書目録』1974年、1～6頁解題参照。同研究所編『早稲田大学社会科学研究所所蔵 日本近代政治史関係文書目録』1997年、3～21頁(同書所収望月雅士解題参照)。柴辻俊六編『早稲田文庫の古文書解題』(岩田書院 1998年)251～252頁。
- 16) これまでの近代史研究において「深谷文書」は僅かながら公刊・利用されている。その中で最も纏まったものは安在・望月編『佐佐木高行日記-かざしの桜』(北泉社 2003年、現在創泉堂出版)である。これは土佐藩出身で明治政府の指導者の一人である佐佐木高行の日記(原本は散逸、写本の一部が宮内庁書陵部と東京大学史料編纂所に所蔵)の未刊部分の刊行で、特別資料室に所蔵されている「渡辺文書」(簿冊番号110～115)の「佐佐木高行日記」と、その欠落部分を埋める「深谷文書」(史料番号265、266)の筆写本2冊を全て収録したものである。同書所収の安在邦夫「佐佐木高行日記」の写本の所在と史料的価値」参照。東京大学史料編纂所所蔵分は1970年～79年に『保古飛呂比』として全12巻で東京大学出版会より刊行。収録年代は1830年～83年である。史料解題としては勝田政治「佐佐木高行「保古飛呂比」」(前掲『日本近代思想大系』別巻所収)が「渡辺文書」へも言及。この他「内大臣府文書」の「元老院国憲案」(史料番号314、315)は深谷により「内大臣府蔵」国憲按」として紹介された(明治文化研究会編『明治文化』第七巻第五号、1934年5月所収)。

## 二 史料群の特徴

### （一）史料群の特徴

詳細は末尾の全体目録に譲るが、和綴写本が史料群の大半を占める。綴られた簿冊（1点）は多少の差はあるものの数十枚から数百枚程度の各種罫紙・原稿用紙を紐で編綴したものである。この罫紙・原稿用紙の銘柄が、本史料群の構造を検討する際に欠かせない情報を提供している。とりわけ臨時帝室編修局や宮内省、春畝公追頌会（伊藤博文伝編纂）用の原稿用紙や罫紙が非常に多く用いられ、それに複数人の手によると思われる筆写原稿やタイプ版、そして謄写版史料などが見られる。深谷本人の書き込みや付箋が貼り付けられている史料も散見される。90年代前半に袋詰めなどの整理がなされた際に作成された全体仮目録と部分的に内容を付したカード目録（安在研究室所蔵）が残されており、これと現在残されている史料を照合することから調査がスタートした。この仮目録に記載された1～511番までの番号は、もともと史料群が収納されていた由井研究室から史学資料室に移管された後、一点ずつ取り出して順に番号付けしたもので、深谷が所持していた頃の原秩序や出所の状態を直接反映しているものではない。今回はこの仮目録をアイテムレベルの情報を加えた細目録に加工し、そこから今後の作業への道筋をつけることを第一の目標とした。巻末に添付した表（深谷文書全体目録）がそれである。

前述したように、本史料群は1965年～73年にかけて大仏次郎氏が『天皇の世紀』を執筆する時、資料として朝日新聞社編集部にかかなりの部分が貸し出された経歴がある。その際に朝日新聞によるとと思われる和装の編綴が施されており、表紙に墨書で各史料のタイトルが付されている。「深谷文書」全体の内、青い表紙を付され、編綴しなおされたと思われる冊子が写本類の8割以上を占める。また古い赤茶色の表紙を付した冊子が少ないながら確認できる。後者は、戦前に編綴されたものと考えられ、前者は綴じ紐が均一で比較的新しい（真白）ことから戦後の再編綴と推定した。青表紙の写本を開いていくと、綴じ込まれた原稿用紙類の多くに、かつてクリップやピンで留めていたと思われる痕跡が数多く残っている。従って、和本類に関しては元々史料が持っていた組織歴・秩序が相当改編されてしまっていることは明白である。これが逆に書翰類と書類で別々に（あるいは複合して）構成される事多い近代私文書には見られない「深谷文書」の大きな特徴をなしているといえる。しかし青表紙が付された史料も仔細に観察すると、クリップ痕や前後の繋がり、全体目録などを活用して他の史料と照合を重ねていくと、元の纏まりをある程度復元可能ではないかと考えられるものがかなり存在する。他方73年に大仏氏が急死したため『天皇の世紀』は戊辰戦争の途中で未完結に終わった。安在教授によると、同年朝日新聞から史料が返還されたが、戻って来なかった（あるいはその後紛失したと思われる）史料が何点かあるという。

その上で本史料群を利用者の立場から、公開後の検索手段を考慮する場合、今回提示した一点ごとの全体目録（とその完成）は言うまでもなく、『天皇の世紀』に伴う編綴作業を経る前の状態をも出来る限り調査し、シリーズレベル以下細かい史料群の成立と深谷の経歴や彼が所属した組織、分量などを比較検討し、大まかであれ史料の内的階層構造を模索していかなければならない。公的組織における資料管理と異なり、私文書に「文書管理規定」なるものは存在しないからである。以上の経過から考えられる「深谷文書」の全体像（シリーズ・レベル）を提示してみたい。

(二)「深谷文書」の全体像

1920年代

1965年

蔵書 ・ 日記 等

1928年

33年

34年

38年

40年

43年

46年

臨時帝室編修局 ・ 公刊明治天皇御紀編修委員会

貴族院五十年史

外務省

神道 ・ 浦田長民関係

伊藤博文伝 (春畝公追頌会)

研究 (明治文化研究会・憲法史研究会関係・著作等)

第一期 (1965年まで)

戦前から戦後の早大時代 (65年まで) の「深谷文書」は、深谷自身の研究利用により、史料ごとに相互に強く結び付けられ、厳密な組織歴の区分が出来ないのが特徴である。クリップどめされた写本原稿類や草稿類と数十冊の和写本 (赤茶色表紙) と原史料類で総計2000点以上あったことが断片的に残された旧カード目録よりうかがえる。蔵書の規模に関しては、現段階ではうかがい知れないが、主として政治外交史を専門としていた深谷の研究歴を考慮すると、伝記・関係文書類を中心に相当の分量があったのではないかと思われる。

第二期 (1965～73年 朝日新聞社への貸出期。総数106点、4点散逸か)

早大時代後半の「深谷文書」は、蔵書はそれ以前と同様程度の分量と推定される。一方「天皇の世紀」への貸し出しのため、テーマごとに編綴され、写本文書類は約400冊に再編された。原文書は約100点である。編綴から漏れた写本史料や原稿等が40点程存在する。朝日新聞社が史料を借りる際作成した『明治天皇関係資料所在目録』<sup>17)</sup>により、その内容が確認できる。巻末全体目録で、備考に「朝」と記入したものがこれに該当する史料である。

第三期 (1975年深谷氏死去、早大搬入後)

この時期の「深谷文書」の特徴は、蔵書の一部が早大図書館・日本史学専修室などへ移管された。そしてある部分は散逸、日記は行方不明となる。蔵書の残部は段ボール4箱 (戦後の早大内研究雑誌と研究文献類) である。史料類は第二期とほぼ同じ分量である。早大移管後の段階であり、筆者等が現在整理に携わっている「深谷文書」の出発点である。深谷生前の完全な状態を復元することが困難であるため、史学資料室に落ち着いた90年代以降の保管状態を記録し、検討を加える起点として設定した。それでもなお現在の「深谷文書」が、生前彼が関係した公私における各組織とそこで生成され、かつ残された元の史料群に大きく規定されていることは明白であろう。従って全体目録上で出所ごとに再分類することで、「深谷文書」を構成する小グループ単位の史料生成プロセスを垣間見ることが出来るのではないか。かかる小史料群の成り立ちを念頭に、全体目録からたどりうるシリーズレベルでの史料群構造を概観してみたい (括弧内はサブ・シリーズレベル)。60年代半ばの編綴で個々の史料が持つ関係性が崩さ

17) 『明治天皇関係資料所在目録』 (朝日新聞社学芸部別室編 1965年12月) は大仏次郎記念館・国会図書館の二箇所のみ閲覧可能である。



れ、簡単には来歴をたどることが出来ないため、史料を1点ずつ確認し、目録に史料情報を反映させ、そこからおよそ史料が蒐集・筆写・作成（編綴）された年代、組織や深谷が執筆した著作の原稿とその利用史料ごとに全史料を将来的には再配置することを想定し、組織歴を優先的に顧慮して考案した分類である。これまでの作業で判明した「深谷文書」の史料構造情報を提示し、次章で個別に検討することにした。

- (一)「明治天皇紀」（臨時帝室編修局・公刊明治天皇御紀編修委員会）
- (二)「伊藤博文伝」（春畝公追頌会）
- (三)「貴族院五十年史」
- (四)「神道関係」（神道・浦田長民・国学院）
- (五)「研究」（研究会・著作）
- (六)「その他」（寺島宗則伝・陸奥宗光伝・天皇の世紀・不明分）

### 三 シリーズレベルの史料概要

#### (一)「明治天皇紀」（臨時帝室編修局・公刊明治天皇御紀編修委員会）

「深谷文書」最大の特徴であり、史料群全体の中で最も多くの分量（約3分の2）を占めるものは、深谷が1928年～38年10月まで関与した明治天皇紀編纂をめぐる宮内省関係史料である<sup>18)</sup>。臨時帝室編修局は、1914（大正3）年に明治天皇の伝記編纂のため宮内省に設置された臨時編修局が発展した組織で、深谷が1928（昭和3）年に入省した時は四部体制（第一部：本多辰次郎御用掛 第二部：本居清造編修官 第三部：渡辺幾治郎編修官 第四部：上野竹次郎編修官）であった。早大を卒業したばかりの深谷は同大出身の渡辺編修官の下に配属される。この頃の史料として「條約改正関係史料雜纂」（史料番号372）が挙げられる。この中で深谷は「此の目次は昭和三年より同年五月にわたり、臨時帝室編修局に於て明治天皇紀編修上の必要より條約改正関係の諸材料を閲読研究して大いに興味を起し、著作をなさんと欲して試みに組織せしものなり」と記し、入省後まもなく条約改正関係史料の調査研究を進め、大いに関心を持ったことを書きとめている。後年「初期議會・條約改正」を筆頭に条約改正関係の研究論文を執

18) 臨時帝室編修局に関する研究として最もまとまったものは、堀口修「『明治天皇紀』編修と金子堅太郎」（『日本歴史』661号 2003年6月所収）と堀口「『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』について」（『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』堀口修監修 ゆまに書房 2003年 第9巻所収）である。この堀口氏には、編修官として『明治天皇紀』執筆に参加した渡辺幾治郎に関する「歴史家渡辺幾治郎について－「明治天皇紀」編修との関連から－」（『明治天皇関係文獻集』クレス出版 2003年 第11巻所収）などがある。本稿は、臨時帝室編修局の組織と人事に関しては堀口氏の研究に負うところが多い。武部敏夫「明治天皇紀の編修構想」（『日本歴史別冊 伝記の魅力』日本歴史学会編 吉川弘文館 1986年所収 67～70頁参照）は編修方針の変遷を明らかにし、堀口氏の研究の土台となった文献である。また岩壁義光「近代の編纂事業と写本」（『法政史学』58号 2002年）、「明治天皇紀編纂と史料公開・保存」（『広島大学史紀要』6号 2004年）は、明治天皇紀編纂で使用された写本類の生成と宮内庁書陵部における管理について論じている。

筆し、条約改正事業を担った寺島・陸奥らの伝記編纂事業に関わって行く原点であろう。同じ頃の編修作業と自身の役割について深谷は次のように回想している<sup>19)</sup>。

ぼくは昭和三年に大学を出て、その年に〔宮内省に〕入ったのです〔中略〕外務省の文書はぼくが大体中心で採集しました。そのほか内閣文庫の公文録・公文類聚、それから各元勲のもの、これはまだ全部とっていなかったのです。たとえば松方家のものは、ぼくが那須の別荘まで行ってとってきたんです。(〔 〕内は筆者による。以後同様。)

この回想から「宮内省」に分類される史料の輪郭がおおよそ判明する。翌1929(昭和4)年6月から1930(昭和5)年2月にかけて、深谷は宮内大臣一木喜徳郎の口達で、明治天皇御手許書類調査委員に任命された<sup>20)</sup>。既に同編修局では、1920(大正9)～21(大正10)年にかけて、明治天皇の側近の一人で侍従だった藤波言忠副総裁が御手許書類の調査を行っていたが、あまりの分量のため難航し、調査打ち切りとなった経緯があった<sup>21)</sup>。深谷によると「数万点の膨大な史料」であったという。この調査で「数万点の中から一番貴重とみなされる二千点ぐらい」を「第一種・第二種・第三種と、貴重度により分類して、その一種を特別に裏打ちして〔中略〕宮内庁の書庫の中にさらにまた倉庫みたいな形のものをつくって、勅封してそこへ入れた」。深谷はこの過程で「立志社憲法草案(日本国憲見込案)」(史料番号316、353)、「元老院国憲案(国憲按)」(史料番号314、315)を発見し、前者は鈴木安蔵が、後者は深谷自身が後に明治文化研究会等で紹介するのである<sup>22)</sup>。深谷は後年「あれを発見したのは、昭和四年に明治天皇の御手許書類からです。御手許書類は写しとってはいかんということになっておりましたけれども、これは大発見だと思ったものだから、秘密に写し取っておいて鈴木君に提供して、発表してもらったのは、たしか昭和十一年です」と回想している。そこでこの発見を裏付けるものとして「立志社憲法草案」を発見した際、深谷が書きとめたメモを以下に紹介する。

この「日本憲法見込案」は予が臨時帝室編修官補として臨時帝室編修局在勤中、昭和四年夏、臨時に内大臣府に設けられたる「明治天皇御手許書類取調掛」の調査員を命ぜられたる時(宮中北溜之間にて調査す)発見せるものにかゝる。未だ世に知れざるものにして極めて興味ある且つ価値ある貴重なる史料なるを以て之を繕写したるものなり。調査は秘密厳守を要するものなるを以て、もとより之を世に公にする能はずと雖も、予一己の史料として予の所蔵せんとするものなり。もし後々に於いて予以外のものこの写本を発見せしとて、之を公にすべからず。写すにはつとめて原本のまゝとなし誤字脱字意味貫徹せざるところ等々すべてそのまゝ、写したり。昭和四年八月十一日、深谷博治<sup>23)</sup>

19) 「座談会 維新史研究の歩み〈第六回〉－明治憲政史を中心として－ 稲田正次・小西四郎・鈴木安蔵・深谷博治・(司会)大久保利謙」における深谷の発言(『日本歴史』日本歴史学会編 吉川弘文館 251号 1969年4月 89、98～101頁)。以後「座談会〈第六回〉」と略記。

20) 前掲「深谷博治教授経歴」229～230頁

21) 前掲堀口論文「『明治天皇紀』編修と金子堅太郎」9頁

22) 前掲「〔内大臣府蔵〕国憲按」、「私擬「大日本帝国憲法草按」」(『明治文化』第十一卷第五号 1938年5月所収)、「漏洩憲法草案の大意」(『明治文化』第十二卷第一号 1939年1月所収)等、「立志社憲法草案(日本国憲見込案)」の鈴木安蔵への提供については、前掲「座談会〈第六回〉」87、89頁参照。

23) 史料番号316に記された深谷メモより。原文は変体仮名使用。筆者が現代仮名づかいに改めた。

後に史料提供を受けた鈴木は「そのころ、憲法制定についてはなかなか史料が手に入らなくて、どんな古い雑誌の中から一つの文章を発見しても、こおどりするような段階で、だから私は大げさにいえば、そういうところに学問的野心を感じて、それを突き抜けてやろうと、それで深谷君なんかとまじわりを結んでから明治天皇御手許書類などをいただいたりして、非常に刺激になったんです」、「立志社案は、土佐では見つからなくて、深谷君から提供されたのです」と話している<sup>24)</sup>。

この期間に採集された史料として「内大臣府文書（一～三十九）」の大部分が該当すると思われる。特に「内大臣府文書 三」（史料番号316）、「同 六」（史料番号319）、「同 三十三」（史料番号346）、「同 三十九」（史料番号352）には、昭和4年の採集日が記されているため年代が特定できる。また朝日新聞への貸出しに際し深谷が行った後年の書類調査においても、この39点に最も多く「内大臣府文書なり」などの追記と日付が記入され、注意深く処理されていることがその証左である。取り分け明治初年の外交史料である「内大臣府文書 六」には「明治天皇御手許書類旧番号一四六六号 此写ハ昭和四年夏明治天皇御手許書類調査拝命中写了セルモノナリ」と記されている<sup>25)</sup>。

天皇紀執筆作業について深谷は「実際に執筆にあったのは編修官と編修官補で、大体最初原稿は編修官補のわれわれが書いて、それを編修官、ほくのほうでは渡辺先生ですが、そこで訂正すると、最終的には三上〔参次〕編修官長から金子〔堅太郎〕総裁のところまでいく。しかし実際は、編修官の段階で最後の原稿はきまるといふうなことです。しかし、総裁と編修官長は見なかったわけではなくて、一応見て、気のついたところは直すと、直したらまた戻ってきます」と話している。深谷の回顧ではその後に、金子総裁が自らの業績を詳しく書くように編修官に指示し、渡辺編修官がそれに従わなかったため、金子総裁から快く思われなくなったことを指摘している<sup>26)</sup>。こうした編修作業中のやり取りを物語るものとして「法律取調委員会ニ関スル調査書類」（史料番号73）を指摘したい。この史料に深谷の筆跡で「昭和七年九月本院総裁金子堅太郎子の命に依り調査提出せるに十月返付せられたり、墨書の書入れ及び傍点ハ金子子爵の施せるものなり」と記されており、金子総裁によると思われる朱書の訂正が所々に入っている。金子の編修への関与を裏付ける記述であろう。また「栃木群馬埼玉三県聖蹟調査報告書草稿及資料」（史料番号240）は、1931年6月に行われた聖蹟調査の結果について、渡辺と深谷の連名による復命書控である。編修局における両者の連携ぶりがうかがえる<sup>27)</sup>。採集した史料の写本作成には深谷の第三郎も加わっていたようである<sup>28)</sup>。

その後も編修作業は続けられ、1933（昭和8）年9月30日に金子総裁ほか三上編修官長、各

24) 註19と同様

25) 明治天皇御手許書類調査と並行して行われた作業として、「広沢参議暗殺関係資料」（史料番号255）の写し取りが挙げられる。同史料中の深谷メモより判明。なおこの史料は山田伯爵家より、1925（大正14）年に臨時帝室編修局が借り受け、1927（昭和2）年に返却された。その時同局で作成された写本の抄録がこの史料である。現在日本大学より刊行されている『山田伯爵家文書』編纂に至る経過については、梶田明宏「解題」（『山田伯爵家文書』総目録 1992年収録）166～167頁を参照。「渡辺文書」にも「山田顕義家文書」（簿冊番号25～29）として、タイプ版の写本が残されている。

26) 前掲「座談会（第六回）」99頁

編修官が昭和天皇に拝謁し、完成した『明治天皇紀』を奉呈して編纂事業は幕を閉じ、臨時帝室編修局は廃止され、残務整理段階へと移行するのである。完成したものはタイプ版「明治天皇紀」260巻(3部)、ガリ版副本1260冊(1部)、原稿260冊(1部)、資料稿本(1344冊)、年表稿本(17冊)、要目6冊、附図一帙(全81図)という空前の分量であった。渡辺編修官は翌年この時の様子や『明治天皇紀』の引用史料類等について述懐している。編修に際し、公文書と私文書の役割を極めて明快に提示しており、編修局内の文書管理の一端を表す重要な証言である<sup>29)</sup>。

[前略] その量に於ては確かに大編修事業で、天皇紀としては我が歴代にその例がないのみならず、東西諸国にもその例は乏しからう、その体裁は御言行、御事蹟の全貌を悉く年月順にか、けて記述し、その複雑なものは紀事本末に書き上げた、詔勅や重要な奏議の外は、如何なるものも総てその意義を要約して記述した、若しこれを原文そのまゝ引用し、記載することにしたらなら、紙数はその幾倍に上つたかも知れない、尤も典拠は悉く書名を掲げ、別に御紀資料稿本を各年毎に編纂して引用資料を保存し、後の研究者に便することにした。[中略] 明治天皇紀は何によつて書いたか、どんな資料が最も役立つかとは、我々の屢々受くる質問であるので、少しく述べて見たい。天皇紀の骨子は宮内省及び内閣諸官省所蔵の公文書であつたといはれやう、国家統治の梗概はそれ等で多く尽してゐる筈だ、だがこれは骨組みだけである、それ等の骨組み、組織結構に血を与へ、肉を付し、生命を植えつけたものは、大臣、重臣や侍従側近等の談話や、諸家の文書、記録の類であつた。[後略]

他には『明治天皇紀』の稿本史料(史料番号77~81、290、301等)や、各編修官補が採集した原史料を執筆に利用するため選別を繰り返した史料集である「史料摘要」類(史料番号163、164、260~264)。採集してきた原史料(写本史料)を系統的に利用に供すべく蓄積した簿冊類と思われる「参考史料調査控」「参考資料調査控」「資料採集控」(史料番号69~72、191、201、272)などが残されている。

渡辺編修官らはこれを機に宮内省を退職するが、深谷達は続いて組織された公刊明治天皇御紀編修委員会(以後「公刊委員会」と略記)に書記として奉職する。サブ・シリーズレベルとしてこの項目を設定したのはこのためである。この「公刊委員会」に関する研究として、その組織活動を明らかにした堀口修氏の研究が挙げられる<sup>30)</sup>。この組織は、完成した『明治天皇紀』

27) 他に渡辺と深谷の共同作業を裏付ける史料として、「子爵日野西資博談話」(史料番号243)を挙げることができる。この談話は、日野西資博『明治天皇の御日常』(新学社 1976年)に収録され、刊行されている。日野西子爵への聞き取りは、渡辺らにより行われたもので深谷は入省前で関与していないが、その写本が「渡辺文書」にはなく、深谷のもとに残されたところに二人の作業の共通性が見出せる。前掲堀口「『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』について」498~501頁参照。

28) 「内大臣府文書 二十四」(史料番号337) 深谷直筆書込みより。

29) 渡辺幾治郎「明治天皇紀編修二十年」(昭和九年四月稿)(『明治史研究』楽浪書院 1934年初版所収) 376頁

30) 堀口修「末松謙澄について - 「末松子爵家所蔵文書」の理解によせて - 」(堀口修・西川誠編『公刊明治天皇御紀編修委員会史料 末松子爵家所蔵文書』下巻 ゆまに書房 2003年)の「二 公刊明治天皇御紀編修委員会」493~499頁。同編修委員会については堀口論文に負うところが大きい。

の内容を損ねることなく圧縮して公刊することを目的としていた。編修長は、編修官長の三上参次がそのまま就任した。深谷の活動は、現在までのところ詳らかにしえない部分が多いが、宮内庁書陵部に残された「編修委員会録」によると「明治天皇紀ヲ台本トシテ、其取捨縮約シテ編纂ス」。記事は「明治天皇紀ハ、専ラ編年体ニ拠リタレ共、公刊ノ御伝記ハ本末体ニ拠ル」。文体については、「明治天皇紀ノ文章ハ漢文直訳体ニシテ、頗ル生硬ノ嫌アリ、公刊ノ御伝記ハ普通文体を用フル」。編集方針は「明治天皇紀ノ編纂ニ従事シタル経験者ヲ使用シ、明治天皇紀編修ノ際ト同ク、大体御年代ヲ四分シ、編修官ヲシテ編修」させるものであった<sup>31)</sup>。書記である深谷の職務は編修官を補佐することであり、実質的に史料の取捨選択や新たな開拓を司るものである。「公刊委員会」の活動は1939（昭和14）年までの第一期と、宮内省図書課公刊明治天皇御紀編纂部に改組され、戦局の悪化と昭和20年の大空襲による皇居への直接的被害により編修事業そのものが中断する（結局昭和21年になって閉鎖）第二期に分けられる。堀口論文によると、その内第一期の成果として、公刊明治天皇紀第一草案（1部42冊）、同第二草案（1部22冊）、公刊明治天皇御紀第一稿本（1部107冊）、同第二稿本（1部107冊）を作成したという。深谷が「公刊委員会」に在職したのは、1938年10月31日までだから、本史料群に含まれる「公刊明治天皇紀草稿 第三編 御壮年時代 上」、「公刊明治天皇紀草稿 第四編 御壮年時代 下—〜三」（史料番号82、177、83、178）は、「公刊明治天皇紀第一草案」か「第二草案」の草稿ではないかと思われる。この他史料採集で深谷は1937（昭和12）年、末松子爵家に所蔵されていた、末松謙澄（伊藤博文の娘婿）が所持した史料群の調査と写本作成を担当していた<sup>32)</sup>。後年の整理で深谷は「伊藤博文外交及憲法意見草稿」（史料番号157）について、「昭和十三年・四年頃末松家より借用 昭和四〇・七・二八」と記しているが、実際はこの時の写本と思われる。「青木外務大臣在職中 條約改正記事」（史料番号169）には「昭和十三年六月二十八日午後八時写し畢んぬ。〔中略〕本書台本は公刊明治天皇御紀編修委員会（元臨時帝室編修局）所蔵の「黒田伯爵家文書」第十四なり」と記され、「公刊委員会」所蔵の史料を写し取り、自らの研究にも利用していたことがうかがえる。「深谷文書」中、「宮内省」に分類できる史料は判明しているものだけで200点を超える。しかし宮内省の組織的記録管理と、そこから更に生じる副本類や写本・草稿類の形成過程について検討し、その一職員であった深谷のもとに残る史料群の位置づけを行わなければ、私文書たる「深谷文書」に限定的に残された宮内省関係史料群の意味はよく理解できないであろう。

31) 同前、494～497頁。

32) 前掲『公刊明治天皇御紀編修委員会史料 末松子爵家所蔵文書』上下巻には宮内庁書陵部所蔵の末松文書全16冊が影印収録されている。このうち、11冊分の「採集人名」欄に深谷の名前が記されている。「採集年月」欄はいずれの写本も昭和12年6月19日となっている。また深谷の書込みもある（同書下巻 455頁など参照）。「深谷文書」に含まれる「末松謙澄書翰」（史料番号510）や「未整理 明治期文書 一、四、五」（史料番号375、378、379）といった末松子爵家所蔵文書のタイプ写本類の一部分や早大中央図書館特別資料室所蔵「渡辺文書」中の「末松謙澄宛書簡他」（末松家文書）（簿冊番号6）について、宮内庁書陵部所蔵分との比較や、「公刊委員会」に直接関与していない渡辺の手許に渡った理由など、史料間の関係性を調査する必要がある。

(二)「伊藤博文伝(春畝公追頌会)」

伊藤博文の伝記を編纂するため財団法人春畝公追頌会が組織され、深谷が参加したのは宮内省「公刊委員会」在職中の1934(昭和9)年である。足掛け6年にわたる史料採集と執筆、(初期は渡辺幾治郎も参加<sup>33)</sup>)尾佐竹猛・村田峯次郎(清風息で歴史家)・平塚篤(伊藤博文元秘書官)・中田敬義(陸奥宗光元外相秘書官)・小松緑(韓国統監時代の伊藤秘書官)による校訂作業を経て、1940年に有名な『伊藤博文伝』全三巻を刊行する。「伊藤博文伝草稿(一)～(十三)」(史料番号9～21)がその時の草稿である。他には、春畝公追頌会用原稿用紙に写し取られた各政治家の関係文書や公文書類が10点ほど散見される(史料番号154、159、171、242、300など)。深谷はこの編纂事業につき、「宮内省にいたるときから続けていた」。「春畝公追頌会という財団法人ができて、博文の功績を顕彰するため、銅像建設と伝記編纂をやることになり、その伝記編纂の仕事を最初渡辺先生が頼まれて執筆することになったのですが、渡辺先生が小松緑という理事長とうまくゆかなくなってやめてしまった、そのあとほくにやってくれということになったのです」と述懐している。伝記執筆について深谷は「史料は、伊藤家のものは全部見ました。伊藤博文伝を書くときは、なまの伊藤家の史料を見たのです」、他家所蔵文書の利用と照合については「明治天皇紀編纂のときに集めたものを利用したわけです。しかし[臨時帝室編修局金子]総裁は、個人的にほくにそれらを利用してもいいといったけれども、[三上]編修官長以下、上官・仲間の連中は、それをこころよしとしないわけです」と回想し、伊藤伝編纂との兼職と史料の融通性をめぐって宮内省内で軋轢が生じたことが分かる。それでも深谷が天皇紀編修の過程で身につけた技術を伊藤伝においても最大限に活用しようとしたことは明らかである<sup>34)</sup>。すなわち明治天皇紀執筆用の写本史料類が伊藤伝執筆において重宝されていたのである。文書群構造として本稿では、(一)「明治天皇紀」(二)「伊藤博文伝」として別々の分類項を立てたが、臨時帝室編修局や宮内省の用箋に筆写された写本類と伊藤伝編纂史料の関係性・重複性が極めて高いことが言えるのである。後年の再編綴により、両者が同一和本中に散見されるのはこれに由来する(史料番号42、49、277、289等)。

また、特別資料室に所蔵されている「渡辺文書」にも、「伊藤博文書簡(伊東巳代治宛)」3冊(簿冊番号1～3)、「徳大寺実則書簡(伊藤博文宛)」(簿冊番号39)、「在欧伊藤参議憲法取調之書簡(明治一五一年) 伊藤博文・岩倉具視等」(簿冊番号47)、「伊藤博文年譜草稿」(簿冊番号56)、「井上馨書簡(伊藤博文宛)」(簿冊番号60)、「伊藤博文宛書簡(元田永孚・三条実美)」(簿冊番号74)、「岩倉具視書簡(伊藤博文宛)」(簿冊番号85)、「木戸孝允・陸奥宗光・伊藤博文宛書簡」(簿冊番号95)、「伊藤博文書簡井上馨宛(井上家文書二)」(簿冊番号100)、「陸奥宗光書簡(伊藤博文宛)」(伊藤家文書)(簿冊番号119)、「伊藤家文書西園寺公望書簡目録」(簿冊番号123)という伊藤関係の写本史料が含まれている。特に、最後に挙げた「伊藤家文書西園寺公望書簡目録」は「深谷文書」257番の「伊藤家文書(侯爵西園寺公望書翰)目録」と同一であり、深谷・渡辺の天皇紀編修と伊藤伝への深い関与を象徴的に示すものである<sup>35)</sup>。その後天皇紀編纂事業を本官とする宮内官として

33) 前掲堀口「歴史家渡辺幾治郎について」3頁参照。

34) 前掲「座談会(第六回)」の深谷の発言 94頁

35) 早稲田大学中央図書館特別資料室所蔵「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」カード目録参照。

立場と、伊藤伝執筆とそれに伴う天皇紀編纂用の機密文書史料の利用が省内で物議をかもし、深谷は1938（昭和13）年10月末に宮内省退官を余儀なくされるのである。

### （三）「貴族院五十年史」

全体のうち20点弱（史料番号30、93～97、126、139、170、210～212、226～227、229～230、232など）と推定される分量であり、貴族院五十年史編纂掛用の緑色柀目の原稿用紙に筆写されている。深谷は宮内省退職の翌日貴族院囑託となり、史料収集の第一線に立って活動した。史料群の内容は、明治中期の条約改正交渉とそれを政治的最重要課題とした黒田清隆内閣に関するものや、黒田と近い立場にある薩摩出身政治家の回想談などが含まれる。貴族院五十年史編纂掛の事業は1938年より開始された。1939（昭和14）年の明治憲法制定五十周年、続く1940（昭和15）年の議会開設五十周年を記念し、政府が大々的な年史編纂を企画したものである。衆議院でも史料収集を中心とした憲政史編纂会（編纂主任：鈴木安蔵）が前年に組織され、長老議員よりの聞き取りや政党関係の史料収集に当たっていた<sup>36)</sup>。深谷はこの経緯について、「当時は、いまじゃ想像もできないくらい貴族院と衆議院とは、事務当局の対抗意識が強かったのです。衆議院のほうに憲政史編纂会ができた以上は、貴族院のほうでも対抗上、それに類する仕事をやらなければならないということになったらしいです」と説明している。両事業を統括する形で尾佐竹猛が委員長として就任し、深谷・鈴木の上に位置していたのである。当時の編修作業の様子を深谷は次のように語っている<sup>37)</sup>。

[前略] 渡辺先生が昭和八年に編修官をやめて、そして憲政史編纂会のほうにいく。ほく [深谷] が十三年に宮内省を首になって、貴族院のほうの主任になったということで、先生といろいろ話をしていううちに伊東 [巳代治] 家のことを思い出して、[中略] ひとつ伊東家へわたりをつけてみようじゃないかというふうなことで [中略] 交渉に行った。[中略、伊東家では孫の治正に代替わり] そういうことで衆議院憲政史編纂会のほうでも貴族院五十年史編纂会のほうでも、伊東家の史料を収集できるようなことになって、これがきっかけになって、のちに憲法史研究会ができたといういきさつがあるのです。

36) 衆議院憲政史編纂会・貴族院五十年史編纂掛の制度・組織については、二宮三郎「憲政資料室前史（上）」（『参考書誌研究』国立国会図書館参考書誌部 43号、1993年所収）に詳しい。

37) 前掲「座談会〈第六回〉」の深谷の発言、90～92頁。

これに対し大久保利謙は後年「そのうちに深谷さんは母校の早大に行ってしまう、開店休業状態になりました。渡辺さんや深谷さんが編纂事業から離れてしまったのは、秘蔵文書を論文で使って公開してしまったという問題がからんでいたのかもしれない」と指摘している。また大久保は、両事業の史料収集の結果「鈴木・渡辺・深谷の各委員たちがそれまで非公開だった史料を駆使して、さかんに研究論文を発表したのです。[中略] しかし、これは軋轢を生みました。議会の非公開の編纂史料を勝手に私用したという非難で、とりえわけ貴族院・衆議院の事務局あたりから強かった」と深谷や渡辺の行為に対し批判的な姿勢を示している。複雑に同じ人脈が絡み合い、各種編纂事業が刻々と移り変わっていくため、大久保の証言については、明治天皇紀・公刊明治天皇御紀編修の時期と後年の憲政史編纂会・貴族院五十年史編修事業期の記憶を混同しているものと推測されるが、他方旧華族出身者としての大久保の立場が反映しているものと思われる。大久保利謙『日本近代史学事始め－歴史家の回想』（岩波書店 1996年）129～131頁

続いて深谷は天皇紀編纂の経験を生かし「こういうのがあるはずだから黒田家へ行こうじゃないか」と、研究者仲間と同掛嘱託の大久保利謙(大久保利通孫)を通じ、黒田伯爵家と交渉するなど史料採集を続けたことを話している。両事業共に具体的な五十年史執筆には至らなかったが、収集成果である写本類は戦後、国立国会図書館憲政資料室の開設後、同室に移管された。戦時中空襲・疎開などで原史料が多く消失したことから、原本に代わる史料群として貴重な存在である。本項に分類される小史料群の特徴として、国会図書館憲政資料室所蔵の「貴族院五十年史編纂会収集文書(旧称「旧貴族院五十年史編纂収集文書」)」との繋がりを指摘しておかねばならない。憲政資料室所蔵分は、戦局が悪化して作業が中止されるまでに集められた史料(貴族院日誌)や写本類を中心に218点が収蔵されている<sup>38)</sup>。この中で同収集文書27「貴族院令の運用第一歩 金子子爵・栗野子爵主催伊藤博文公座談会」は、「深谷文書」史料番号242と同一内容である。座談会は1935年の開催なので、貴族院五十年史編纂掛結成前である。従ってとも伊藤博文伝編纂のために用いられ、それが深谷により貴族院五十年史編纂事業でも活用されたことを示している。また同収集文書157-1~4「伊沢多喜男談話筆記」は「深谷文書」史料番号210と同一である<sup>39)</sup>。この聞き取りは、1941(昭和16)年6月17日と7月2日に深谷と尾佐竹猛が伊沢邸を訪問して聴取したものである。複数作成されたタイプ写本が深谷の手許にも残ったと思われる。ここからも、この小史料群は憲政資料室所蔵分と切り離して考えることは出来ない。むしろかつてその一部分をなしていたと言えよう。編纂スタッフは、委員長の尾佐竹、主任の深谷、嘱託の大久保利謙、そして写字生が何人かいたようである<sup>40)</sup>。

次に「憲政史編纂会」との関係について触れておく。同会は尾佐竹猛が委員長となり鈴木を主任格<sup>41)</sup>として、1937年に衆議院内に設置され、議会関係者の談話聴取や史料収集を開始した。編纂員は尾佐竹委員長と委員・嘱託3名(鈴木・渡辺)・雇員6人、タイピスト1人であった<sup>42)</sup>。現在憲政資料室で「憲政史編纂会収集文書」(以後「収集文書」と略)としてマイクロフィルムによる閲覧が可能であり、総数1102点(25部門<sup>43)</sup>)が収められている<sup>44)</sup>。「収集文書」の史

- 38) 国会図書館憲政資料室所蔵「貴族院五十年史編纂会収集文書目録(仮)」参照。大久保は後年、貴族院五十年史編纂掛の収集史料の特徴を大木喬任と黒田清隆の文書であると位置づけている。前掲大久保『日本近代史学事始め』130頁
- 39) 大西比呂志・吉良芳恵(伊沢多喜男文書研究会)編『伊沢多喜男関係文書』(芙蓉書房 2000年)477~509頁に全文収録。同書解題によると、伊沢文書に残るものは同一タイプ版であるが伊沢の書込みがなされているという(706頁)。
- 40) 前掲大久保『日本近代史学事始め』125頁、前掲二宮「憲政資料室前史(上)」。
- 41) 竹中佳彦『日本政治史の中の知識人』上巻(木鐸社 1995年)249~251、293、396頁。竹中氏によると、鈴木は1937年10月に出版した『現代憲政の諸問題』が即日発売禁止となり、出版法第二十七条違反で起訴されて有罪判決が出たため、1938年2月に憲政史編纂会の編纂委員を辞任した。しかし尾佐竹猛の努力で、同編纂会の仕事をそのまま続けることができたのである。
- 42) 前掲大久保『日本近代史学事始め』126頁、前掲二宮「憲政資料室前史(上)」、大久保「憲政史編纂会の憶い出」(『日本歴史』500号 1990年1月所収)
- 43) 25部門は次の通り。「左院・元老院国憲案」「皇室及皇室典範関係資料」「明治憲法諸草案」「外国人ノ憲法草案及答議、講義」「私擬憲法」「外国憲法並諸法律、訳」「憲法関係著書」「枢密院会議筆記」「枢密院関係資料」「内閣制度 議院法 民法等」「民選議員建設意見書」「国会開設願望意見書」「議会議事録」「憲政関係参考資料及著書」「政党、結社関係資料」「地方制度関係資料」「行



料番号125 (R19)<sup>45)</sup>「帝号大日本国政典（伊勢市浦田家）」、558 (R111)「河瀬真孝意見書取」、616 (R122)「遺韓大使伊藤博文復命書（春畝公追頌会）」(615「奉使記事」と同一内容)、617「伊藤（博文）統監謁見始末、竝大臣会議筆記1～4（深谷氏）」、618「小宮氏蒐集伊藤（博文）公伝記資料（深谷氏）」、619 (R123)「春畝公逸事（上泉中将・室田義文・金子堅太郎等ノ談話筆記）（深谷氏）」、620「明治二十五年伊藤博文ノ政党組織問題（読売ヨリ抜粋セル経緯史料二冊）」、621「春畝公追頌会蒐集『伊藤博文・井上毅・渋沢栄一書翰写（深谷氏）』」、734 (R182)「西園寺公年譜（深谷博治氏）」には、史料提供者として深谷の名が見える。伊藤伝編纂に深谷が深く関与したことから推測しても、深谷を介して渡辺ないし鈴木に提供され、それが「収集文書」に収録されたと見て間違いない。この他にも、「中田敬義氏述 日清戦争ノ前後」（「深谷文書」史料番号154、196）が、「収集文書」550番として収録されるなど、照合を進めるほどに両事業の関係の深さを看守できる。「収集文書」142 (R20)「日本憲法見込案解説一冊」は、深谷から史料提供を受けて鈴木が執筆した史料改題であるが、「深谷文書」には、同内容の「鈴木安蔵氏 日本憲法見込案解説」（史料番号241）が含まれている。この見返しに「『日本憲法見込案』解説試稿 謹呈 深谷博治学兄」と記されており、鈴木が解題を脱稿後、深谷に校閲を仰いだことが分かる。主任であった鈴木自身「深谷君なんかの助力を得て、一生懸命史料だけを集めようとした<sup>46)</sup>と回想しているのはそれを裏付けるものである。

以上「貴族院五十年史編纂掛」並びに「衆議院憲政史編纂会」の組織的活動と、「深谷文書」「渡辺文書」に含まれる両事業に関わる小史料群の位置づけを概観した。写本類の書誌的考察、更には関係者の著作物等から事業の全体像を復元し、両会の軌跡をたどり、史学史的な文脈の中に位置づけることが可能である。

#### （四）「神道関係」（神道・浦田長民・国学院）

「深谷文書」の中で（一）「明治天皇紀」関係史料に次いで多くの分量が残されているのがこの小史料群である。宇治山田の神職であった浦田長民に関係する史料がその大半を占めており、これをサブ・シリーズレベルとして設定した。ここに分類される史料には神宮司庁の原稿用紙が用いられているケースが非常に多い。神道関係の内容の多くは明治維新期の伊勢神宮における玉座移動問題や、祭祀や儀式関係（「神宮御改革」）に集中しているようである。謄写版印刷物（史料番号76、84、108～110など）も少なからず含まれている。史料番号224や286のように明治天皇の伊勢神宮行幸に関する神宮側の記録もこの中に含まれる。他の神道関係史料同様に神宮司庁原稿用紙に書き写されているものの、深谷の手許に残った経緯が不明であること、残された「深谷文書」とこれまでに判明している深谷の研究業績中に伊勢神宮関係が見当たらず

政裁判法、刑法」「建白及意見書」「勅語、案文等資料」「主要事件 国内問題資料」「外交問題主要事件資料」「伊藤博文関係資料」「伊東巳代治著書等」「井上馨関係文書」「井上毅関係文書」「植木枝盛関係文書」「諸家文書（書翰等）」「履歴、伝記集」「談話筆記等」

44) 憲政史編纂会収集文書については、広瀬順昭編『憲政史編纂会旧蔵 政治談話速記録』全10巻（ゆまに書房 1999年）、同広瀬編『憲政史編纂会旧蔵 伊東巳代治日記・記録』全7巻（ゆまに書房 1999年）所収の広瀬解題参照。

45) Rはマイクロフィルムのリールを示す。

46) 前掲「座談会〈第六回〉」の鈴木安蔵の発言、86頁。

ないことから推定して、天皇紀編修用に採集された可能性は否定できない<sup>47)</sup>。

他方同じ原稿用紙を用いた神道関係史料群の中に浦田長民に関係する写本文書9冊(史料番号111~114、134、193~195、220)が含まれる。浦田は明治初年神祇省に奉職し七等出仕を勤め、後年出雲・伊勢少宮司を歴任した宇治山田地方の有力者である。浦田に関しては、三木正太郎・武田秀章<sup>48)</sup>両氏の研究が挙げられる。三木論文によると伊勢神宮を管轄する神宮司庁の図書館に相当する「神宮文庫」に「浦田長民文書」が所蔵されている。この神宮文庫所蔵史料の概要と「浦田文書」がいかなる文書群なのか分からないが、おそらく本史料群に含まれる神道・浦田関係の文書はその写本である可能性が高い。更に本史料群中には、神宮司庁の公文書である神宮司庁公文類纂の写本であるものの、実質的には浦田の活動記録として位置づけられる「神宮教院資料(一~二)」(史料番号104、105)が含まれている。この他国学院大学・皇典講究所の原稿用紙を用いた別系統の神道関係写本も数点含まれる(史料番号75、248、251、360、362、内容から361も該当)。特にこのグループにおいて重要な点は、「『帝号日本政典』草案」(史料番号220)の存在であろう。史料本体に深谷の手で「本書は明治初年の神宮小宮司浦田長民の遺文書の一なり 昭和十六年春、同文書調査整理をなしたる神宮の嘱託松本勝三氏より贈らる」と記されており<sup>49)</sup>、明治初年に起草された浦田長民自筆の草稿史料とみられる。神道史において重要な史料ではないかと推察される。昭和13年に深谷は宮内省を退職しているので、このメモから深谷は天皇紀編修時以外にもかかる史料を収集していたのである。この分類における今後の課題は、浦田長民に関する原史料類約90点(史料番号400~485)をどのように「深谷文書」全体の中に位置づけて考察すべきかということである。神道関係史料の全体像と天皇紀編修史料との関係性、そして浦田関係文書の来歴、深谷の関与や史料採集の実態については断片的な事柄が多く、現状では良く分からない。当面は三木論文を手がかりに神宮文庫所蔵史料を調査し、「深谷文書」に含まれる史料の出所を確定すること。第二に、伊勢神宮と神宮文庫所蔵「浦田長民文書」の集積過程を把握し、それと比較することによりシリーズレベルの特長を捉えていくことになるのではないかと考える。

#### (五)「研究」(研究会・著作)

近代史研究者として深谷は、1928(昭和3年)年10月、明治文化研究会の会員となった。これを皮切りに、1936(昭和11)年には前年に尾佐竹や鈴木安藏らが結成した明治政治史研究会に参加し、1938(昭和13)年には鈴木やE・H・ノーマンらと近代日本史研究会を結成し「近

47) 前掲岩壁「近代の編纂事業と写本」62頁によると、『明治天皇紀』編修用の仮稿本作成に当たり、調査・収集の対象となった資料所蔵先に「寺社及び寺院」が含まれる。

48) 武田秀章「明治初年の神祇官改革と宮中神殿創祀 - 小中村清矩・浦田長民の建白をめぐって -」(『國學院雑誌』90-8 1989年8月 所収)、三木正太郎「浦田長民を中心とする神宮祇官の活動」(『日本思想史の諸問題』皇學館大學出版部 1989年、初出は『明治維新神道百年史』第5巻1968年)。ここでは明治初年の浦田の動きを詳細に明らかにした三木論文を参照。他に伊勢市編『伊勢市史』(1968年)参照。

49) 深谷は同じ松本勝三より「明治元年法制史料 一」(史料番号202)、「内大臣府文書 三十九」(史料番号352)も譲り受けている。後者に記載された深谷のメモから、松本勝三は臨時帝室編集局で深谷と同僚の編修官補だったことが判明した。

代日本歴史講座」（白揚社）の刊行に携わる<sup>50)</sup>。そして1941（昭和16）年より鈴木や田中惣五郎、伊東治正伯爵らと憲法史研究会を結成し、研究と史料収集を精力的に行った<sup>51)</sup>。戦前期の主たる研究会活動は以上である。各研究会組織の史料については、本史料群中に残されたものからでは、深谷の関与は勿論、研究会の概要さえ見渡しえない。また当時深谷は生涯で最も著作に励み、研究書を数冊刊行する。しかし、膨大に存在したと考えられるその原稿類もごく僅かしか残されていない。これは「深谷文書」の史料的な限界性を物語る重要な点である。本節では、残された史料から判明する研究会活動の簡単な言及にとどまることをお断りしておきたい。

明治文化研究会については、戦前深谷が最も長く関係したため、講演や機関誌の原稿・草稿類が見られる（史料番号121、148、186）。年譜に記載された著作目録や『明治文化研究会事歴』<sup>52)</sup>によると、昭和10年から14年にかけて深谷は盛んに研究を発表した。大久保はこの時期の深谷周辺について「尾佐竹先生はなかなか人集めがうまかった。深谷博治・渡辺幾治郎・田中惣五郎・松下芳男さんなども尾佐竹グループに組み込まれましたし、わたしもまた、抱き込まれた一人とっていい」と語っている<sup>53)</sup>。

明治政治史研究会については、年譜によると深谷は1936年頃機関紙『明治政治史研究』の刊行に協力したとあるが、同会編集物は『明治政治史研究』『憲法解釈資料』<sup>54)</sup>が知られるのみであり、本史料群には草稿等の痕跡が残されていない。

この分類において組織的活動の一端を示す最も纏まったものは、憲法史研究会の関係史料である。同会については竹中佳彦氏<sup>55)</sup>が、深谷と「畏友」関係にあった憲法学者鈴木安蔵を中心に詳しく明らかにしている。詳細はそれに譲るが、同研究会は1941年1月19日に伊東治正伯爵を主催者として、尾佐竹・鈴木・深谷・大久保・田中惣五郎・渡辺らが参加して結成された。大久保は「あまり知られていないが、あの当時であれだけの権威者を網羅したことは注目すべきことで、あの頃の憲政史研究上に、いわば暗中の燈火のような存在でした」と高く評価している<sup>56)</sup>。会規には伊東伯爵〔巳代治〕文書の利用と研究例会の開催、そして帝国憲法に関する史料その他の出版が掲げられている<sup>57)</sup>。これに基づいて、例会が華族会館や京都の都ホテルで開かれた。例会の速記録と関係史料の翻刻がガリ版刷りでなされ、関係者に配布されたという。このような史料が全部で60数冊刊行されたと言われている。大久保は自らの手許に残る関係史料として美濃部達吉の講演記録に言及している<sup>58)</sup>。この史料は「深谷文書」（史料番号127）、「渡辺文書」（史料番号121）にも残されている。これを含め深谷のもとに残された謄写版の史料（史料番号127、128、140）5冊が憲法史研究会関係に該当する。会の組織的活動や存続期間については、憲政資料室の大久保利謙所蔵文書などから足跡を洗い出す必要があろう。

50) 深谷自身は1940年に同シリーズ第4冊として『初期議會・條約改正』を出版。

51) 前掲「深谷博治教授経歴」229～232頁

52) 田熊渭津子編『明治文化研究会事歴』（関西大学国文学会 1966年）

53) 前掲大久保『日本近代史学事始め』88頁

54) 『明治政治史研究』ナウカ社 第一輯 1935年、第二輯 1936年。『憲法解釈資料』1936年

55) 前掲竹中『日本政治史の中の知識人』上巻 293～294頁

56) 前掲「座談会〈第六回〉」96頁

57) 前掲大久保『日本近代史学事始め』131～138頁

58) 同前

明治史研究会については「明治史研究会創立趣意書」(史料番号384)断片が含まれる。史料に、今から5年前に鈴木安蔵が明治政治史研究会を発会した旨記載されているので、そこから推定すると、1941年頃の研究会関係史料ということになる。しかし、後段が欠損していることから詳細は不明である。

その他戦争末期の1943年末に、石橋湛山後援のもと清沢淵を会長とする日本外交史研究会が結成され、深谷は幹事に就任した<sup>59)</sup>。この研究会は元外交官より談話を聴取したとされているが、実際の活動は明らかではない。本史料群中に「幣原喜重郎 外交問題回顧談」(史料番号187)が残されている。これは管見の限り同研究会唯一の成果である。

#### (六) その他(寺島宗則伝・陸奥宗光伝・天皇の世紀・不明分)

1943(昭和18)年貴族院囑託を退いた深谷は外務省囑託となり、外交史編纂と民間に眠る外交関係史料の調査収集に携わるようになった<sup>60)</sup>。この時期に蓄積されたと思われる史料を「その他」として分類した。これは外務省囑託時代に公務で作成した史料がほとんど残されていないため、「外務省」という独立項目が立てられないこと。そして(五)に分類した研究活動にも該当しないからである。まず、明治期に外務卿を務めた寺島宗則の伝記編纂事業への参加が挙げられる。深谷は大久保の紹介でこの事業に参加した<sup>61)</sup>。戦局悪化のため途中で中止され、戦後再開されなかったため幻の企画に終わった事業であるが、「深谷文書」にはこの草稿と思われる原稿類や諸史料を見ることが出来る(史料番号172、365、366)。特に後者2点は伝記草稿の第十章から十二章部分であり、詳細に原史料を引用した本格的な伝記に仕上げる予定であったことがうかがえる。他に寺島関係の原物史料が10点ほど含まれる(史料番号390~394、396~398)。同時期深谷は早大教授だった浮田和民の記念論集に「寺島外務卿時代の対米条約改正交渉」<sup>62)</sup>と題する論考を発表しており、これらを含めて寺島伝編纂事業と深谷の関係については捉え返す意味が充分あるだろう。深谷の死後1980(昭和55)年、寺島家の別荘から大量の古文書類が発見され、これを機に大久保・土屋喬雄・小西四郎・稲生典太郎・高橋善七が寺島伝を作成し、関係文書を翻刻して刊行すべく「寺島宗則研究会」を組織した。その過程で1984(昭和59)年8月、「深谷文書」中の寺島関係史料写本の存在が明らかとなった。そこで関係史料が同会に提供され、多くの史料が収録されることになったのである<sup>63)</sup>。

「寺島伝」とほぼ同時期に深谷が関係した事業として「陸奥宗光伝」編纂事業を挙げることができる。「深谷文書」中には陸奥の長男である陸奥広吉からの来翰なども含まれており、こ

59) 前掲「深谷博治教授経歴」231~232頁

60) 同前、外務省百年史編纂事業委員会編『外務省の百年』(原書房 1969年 下巻)1279~1313頁には外務省記録(日本外交文書)の編纂や他に刊行された様々な著作物、戦時下の対応などが細かく記載されているが、囑託時代の深谷博治やその史料収集作業に関する記述は全く含まれていない。

61) 前掲「深谷博治教授経歴」232頁

62) 早稲田大学史学会編『浮田博士史学論集』(六甲書房 1943年9月所収)

63) 寺島宗則研究会編『寺島宗則関係資料集』上下巻(示人社 1987年)以上の経過については、同書下巻末所載の「編集後記」による。同書において「深谷文書」から収録した史料には、(深谷文庫)として出所が記されている。

うした分類が可能であろう（史料番号374、381、383）。戦局の悪化により、結局「陸奥伝」も「寺島伝」同様に完成することなく終わったが、伝記作家としての深谷の一面をうかがわせるものである。史料番号381に含まれる深谷宛陸奥広吉書翰から、1941～42年頃両者がかなり頻繁に連絡を取り合い、史料を融通しあって伝記作成に向けた環境作りを整えていたことが分かる<sup>64)</sup>。しかしながら陸奥広吉が1942年に死去したこと、深谷の手による陸奥伝草稿（史料番号383）がごく断片なので、どの程度の組織で伝記編纂を行っていたのかは不明である。ちなみに後年、陸奥の没後七十年を記念して『陸奥宗光伯』が編纂された際、深谷は年譜の校訂に携わっている<sup>65)</sup>。

最後に「天皇の世紀」をめぐる史料について触れておかなければならない。「深谷文書」の写本史料全体がそのために編綴し直されたといっても過言ではなく、文書群全体への影響は測り知れない。すなわち「深谷文書全体目録」右端2列目に「○印」で示したように、朝日新聞社用原稿用紙で細目録等が作られ、挿入（または同封）されているものは、ほぼこの結果と見て間違いのないと思われる。しかし実際に貸し出された史料は約100点にとどまり、そのほとんどが大仏氏の執筆に活用されることなく、約8年の歳月を経て深谷の手許に戻ってきた。貸し出しに際し、深谷はきめ細かい配慮をしながら写本断片を整理し、テーマに沿った纏まりを再構築していったことがうかがえる。史料の多くに鉛筆書きで1965（昭和40）年～67（同42）年の日付と種類、深谷のサインが書き込まれ、この時期に休日などを利用して、それまでであった2000点以上にのぼったとみられる「深谷文書」の原型を現存する形へと再編していったのであろう<sup>66)</sup>。「明治天皇紀」や「伊藤博文伝」など、過去にメインとなる組織歴を持つ写本史料群の中であって、この分類に相当する唯一の史料が『史料・天皇の世紀』出版企画試案（史料番号365）である。朝日新聞社原稿用紙35枚にペン書きされ、表紙に「一九六七・四・一〇 深谷博治」と記された深谷の直筆原稿で、所蔵史料をほぼ同社に貸し終わった段階のものである。そこに「深谷文書」の内的構造把握に不可欠の内容を含んでいる。深谷はこの中で『天皇の世紀』の執筆に使用した史料が「従来のこの種 [の] 作品が巷間の一般史料のみに頼ったのと著しく趣きを異にすることを読者に感知せしめ」、「作品愛読者が、この史料集に対しても強く関心を惹く」ことを意図し、作品とタイアップした史料集たる『史料・天皇の世紀』を朝日新聞社より出版することが望ましいと提案しているのである。収録史料は「原則として未公開史料」を優先し、「史料の出所を明記しない」方針を打ち出している。出所情報が不可欠の史

64) ちなみに深谷は、外政家として陸奥宗光の手腕を高く評価しており、「条約改正は陸奥宗光の特権」（『明治文化』第九巻第三号 1936年3月所収）、「陸奥宗光の「讓位的保守論」対策」（同前 第九巻第五号 1936年5月所収）、「第一次松方内閣の成立」（前掲『明治政治史研究』第二輯所収）、「憲法上論文の誤謬と井上毅の進退伺」（前掲『明治文化』第九巻第十一号 1936年11月所収）という4論文を陸奥小太郎というペンネームで出している。このペンネームはその後私的には時折用いていたようである。例えば「伊藤博文の官民調和思想」（史料番号146）にも深谷の書込みで「陸奥小太郎」とある。前掲「深谷博治教授経歴」236、242頁参照、明治文化研究会における深谷の活動については、前掲『明治文化研究会事歴』参照。

65) 陸奥宗光伯七十周年記念会編『陸奥宗光伯－小伝・年譜・付録文集』（霞関会 1966年、1992年再版）179頁参照。

66) 由井正臣氏によると、この作業には朝日新聞関係者と深谷ゼミ生も加わっていたという。

料集編集にとり、この見解は不可解に見える。しかし、深谷は提供した史料が天皇紀編修用の内部史料だったことを意識し、「これまで秘密扱いされたものが大部分であるから」と慎重な配慮を怠らない。そして深谷は、史料集の監修者として自らの他に大久保・洞富雄・小西四郎の名を上げ、「この史料は、故渡辺幾治郎氏および、深谷が、臨時帝室編修局〔中略〕在職中、個人的努力によって蒐集したものが大部分なので、万事なかれ主義の宮中官僚その他から無用の疑念をもたれるおそれが全然ないとは言えない。よって監修者数を多くすることによりその煩をできるだけ避けるとともに、それら監修者諸氏の蒐集した未公開史料をも収録し、より充実した史料集たらしめたい」と編集の意義を述べている。しかしながら結局この企画も日の光を浴びることはなかった。それでも明治百年のブームの中で、深谷自らかかる企画を立案し、宮内省時代の史料群を「公開」しようとしたことは特筆すべきものであろう<sup>67)</sup>。同試案の後段で深谷は「この史料集は歴史学研究者だけでなく、広く一般者を対象として出版するものである」と記している。かつて利用したい史料を採集するのにどれほど苦勞したのかを物語ると同時に、深谷はこの史料(集)を歴史学界のみの狭い存在とせず、一般の共有財産たるアーカイブズだと認識していた。そしてそう位置づけることで、自ら採集した史料群も広く近代社会を振り返る道具として再活用され、研究を優先させた自らの行為もようやく再評価されると考えたのであろう。明治天皇や元勳政治家に関する夥しい著作を残した渡辺は別にして、これまでの深谷の業績に対する史学的評価は、戦前の実証的政治史研究の代表例たる『華士族秩禄処分の研究』、『初期議會・條約改正』を除き、現在も決して高いとは言えない<sup>68)</sup>。「深谷文書」がこれまで公開されることなく、転々と場所を変えて保管されてきた経緯も如上の経過と関係があるように思われる。その意味でこの出版企画案に込められた深谷の内なる声は傾聴に値するであろう。

## 終わりに

### (一) 史料群構造から見た「深谷文書」の成立経緯

以上「深谷文書」の来歴と構造を深谷の経歴と関連させて考察し、史料群の特徴というべき階層構造を提示してきた。考察対象が公文書資料であれば、その資料群を生み出した組織の記録管理の変遷をたどることで、当該組織の特質やその組織を周辺から規定している社会の一端を照射したことになるであろう<sup>69)</sup>。しかし、こうした「近代公文書論」と言うべきアプローチ手法は、こと私文書に限ると簡単に適用出来るわけではない。それでは私文書である「深谷文

67) 同時期に朝日新聞社より刊行された『資料 明治百年』(1966年)との関連性が想起される。ちなみにこの史料集の編集には、深谷の研究者仲間である大久保利謙と宇野俊一が参加した。

68) 例えば、大久保利謙「私の近代史研究(続)」(『日本歴史』405号 1982年2月 所収)64~68頁で、大久保は鼎談相手の伊藤隆・土田直鎮両氏に、伊藤伝・憲政史編纂会・憲法氏研究会について述べ、研究仲間としての深谷について論じている。その中で伊藤氏が深谷の研究業績を再評価する必要性を提起している。

69) 前掲『アーカイブズの科学』、安藤正人『記録史料学と現代』(吉川弘文館 1998年)、前掲『史料の整理と管理』

書」に関し、かかる考察を試みる意義は一体いかなるものであろうか。深谷博治という個人が、研究者として生涯にわたり集積した各種史料類は、深谷の個人的史料であることは勿論であるが、同時に社会的存在である彼が直接間接に関与した様々な組織的活動の痕跡でもある。従って、その史料構造を分析することで、深谷自身の足跡は勿論、深谷が関与した組織の一側面、そしてその組織を大きく包み込んでいた戦前期（研究者集団を中心とする）社会のあり方をも映し出すのではないか。今回、深谷の関与した組織ないし研究プロジェクトに絞る史料を階層化し考察したのはこのためである。もとより「深谷文書」は一私文書に過ぎず、本稿で分析した史料群構造が他の私文書群の性質と同一の普遍性を持つものではない。しかし研究手法は勿論のこと、事例研究すらほとんど蓄積のない近代私文書論について、記録史料学が今後どのように向き合っていくのか。戦後60年を経た現在、行政文書のみならず私文書をめぐる管理保存・公開プロセスを検討し構築していく事もまた、喫緊の課題であることは論を俟たない。

史料群の中核をなす宮内省時代の史料については、臨時帝室編修局編修官補という公職にあって、公務で採集・筆写したものである。中には天皇の身邊に関する記録、すなわち宮中の部外秘扱いだったと思われるものが相当数含まれる。もともと公開する意図がないものや、天皇紀編纂だけに利用を限定し、非公開を前提に諸家から借り出してきたものが大半を占めると推測される。私文書として深谷や渡辺の手許にこうした写本史料が残った理由は三点考えられる。一つは、言うまでもなく宮内省における公務で諸家から借り出してきた文書類を翻刻し写本を作成したことによる。この場合当然その写本本体は宮内省に残され、後身組織である宮内庁書陵部に所蔵されている（はずである）。第二に、「立志社憲法草案」を発見し、密かに写し取った際の深谷メモに代表されるように、彼やその上司だった渡辺幾治郎の意識として、「これは学会のためになる〔中略〕非常に貴重な史料だから」私家版の写本を作る、「私するのではない」<sup>70)</sup>というように公務と研究を表裏一体のものとして位置づけ、場合によっては「公益となる研究」を優先させることを辞さなかったことである。そして第三に、深谷が宮内省に在職した時期は、明治天皇紀の編纂が最もピークに達していた時期である。渡辺がこの様子を「我々が非常に多忙になったのはこの〔1933年の完成までの〕七年間で、暑中休暇などはとれなかつた、最後の二ケ年は日曜も休まなかつた。無論夜業もした。止むを得ぬ地方の出張調査は夏期中か歳末休暇を利用した。我々はこれを連続の強行軍といつて、かうなつては編修の成否は、頭脳の問題でなくて、健康の問題だ」と懐古しているように、天皇紀の完成を促すため私宅で史料を渉猟させたことも度々あったのである<sup>71)</sup>。この結果編修官や編修官補が大量の史料を自宅に持ち帰り、寸暇を惜しみ時間外の整理編修作業を続けたのである。そのため公式・非公式に大量の副本や仮本、仮稿本史料が派生し、結果として編修に携わった関係者の私文書中にも、こうした形で組織の一端を示す文書が残されたのである。筆者は特に第三点目を、「明治天皇紀」関係写本史料の成立契機として捉えている。

70) 前掲「座談会〈第六回〉」92頁、深谷・鈴木が「井上毅文書」を内々に写し取った経緯に関する発言。

71) 前掲渡辺「明治史研究」375頁、前掲堀口「『明治天皇紀』編修と金子堅太郎」13頁。前掲岩壁「明治天皇紀編纂と史料公開・保存」18頁によると、昭和2年6月以降宮内省では、編修官補に職務時間外の史料狩猟と検討を許可した。

## (二) 今後の課題

最後に今後の課題を提示して筆を擱くことにしたい。先ず「深谷文書」を構成する小史料群構造を注意深く捉えることである。前章各節で言及したように、史料間の絡み合いが強い特質を一層意識しておくべきである。天皇紀編修過程で宮内省と関係者に蓄積された写本史料類は、その後各伝記編纂事業においても中核史料として再利用されていく。つまり、今回提示した個別の階層分類に収まりきらない部分が必ず生じていることである。次に朝日新聞社への貸し出しに際し行われた、史料の合綴問題である。この両者が現存する「深谷文書」の史料性質を決定付けたのである。その上で第一に、宮内庁に残された臨時帝室編修局や公刊明治天皇御紀編修委員会(最上位階層)の史料群と「深谷文書」の関連性、並びに史料生成サイクルの把握問題である。これに「渡辺文書」を併せた三者間の史料構成について立体的に把握していくことも求められよう。そして第二に、神宮司庁神宮文庫に所蔵された「浦田長民文書」の史料構造の確認と深谷の関与を跡付ける必要がある。

次に、「深谷文書」の内容である。繰り返し述べるが、深谷と尾佐竹猛、鈴木安蔵との子弟ないし交友関係は、本史料群を多面的かつ内在的に捉えるため不可欠な要素である。鈴木著作には深谷から密かに提供を受けた史料類が多数用いられているという。また明治文化研究会への参加を通じ、両者は尾佐竹猛から特に深い薫陶を受けた。例えば「新定條約草本」(史料番号228)で深谷は「尾佐竹博士所蔵原本に拠り筆写す〔中略〕昭和十三年臘月」と記しており、尾佐竹から借りて筆写したものであることが分かる。「座談会〈第六回〉」においても、深谷と鈴木は共に尾佐竹を追慕している。こうした三者間の研究活動を複眼的に捉え直すことで、史学史的には勿論のこと、戦中期の自由主義的研究者グループの活動を再評価することにつながるのではないか。本稿では記録史料学的考察にとどまらない領域(近代日本史学史・各編纂事業の内実、深谷の政治外交史研究と著作物、思想)への言及は最小限にとどめた。今後本史料群を整理・活用していくには、深谷を取り巻く人脈は勿論、昭和戦前期の歴史学界の動向や明治文化研究会を中核とする諸研究会の性質、社会的背景などを踏まえなければならない。かかる周辺領域の検討は将来の研究課題としたい。



深谷博治旧蔵文書の研究（荒船）

深谷文書全体目録

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・白筆など	組織・分類	備考	用紙	明日新聞社 日録	旧カード 日録有無
1	1	「明治十八年政変関係史料 一～二」	2冊	写本	(明治天皇紀)	一経過史料・二参考史料	臨・宮		
	2	「叙勲関係史料」	1冊	写本	明治天皇紀	明治15年～31年までの叙勲			
	3	「神祇関係史料（大教宣布史料其他）」	1冊	写本	神道				
	4	「明治元年法制史料 二」	1冊	写本		明治元年閏4/21～10/30まで			
	5	「黒田清隆書翰」	1冊	写本					
	6	「桂太郎 西園寺公望書翰」	1冊	写本					
	7	「皇室関係史料雑纂」	1冊	写本					
	8	「地方自治制度関係史料」（井上毅関係文書）	1冊	写本					
	9	「伊藤博文伝草稿 一」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	10	「伊藤博文伝草稿 二」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	11	「伊藤博文伝草稿 三」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	12	「伊藤博文伝草稿 四」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	13	「伊藤博文伝草稿 五」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	14	「伊藤博文伝草稿 六」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	15	「伊藤博文伝草稿 七」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	16	「伊藤博文伝草稿 八」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	17	「伊藤博文伝草稿 九」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
2	18	「伊藤博文伝草稿 十」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	19	「伊藤博文伝草稿 十一」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	20	「伊藤博文伝草稿 十二」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	21	「伊藤博文伝草稿 十三」	1冊	タイプ・朱書	伊藤伝		春紙		
	22	「山縣公爵家文書」		貸出中	未調査				
	23	「山縣公爵家文書」		貸出中	未調査				
	24	「岩倉公爵家文書 一」	1冊	写本	明治天皇紀		宮	○	
	25	「岩倉公爵家文書 二」	1冊	写本	明治天皇紀		宮	○	
	26	「岩倉公爵家文書 三」	1冊	写本	明治天皇紀		宮	○	
	27	「岩倉公爵家文書 四」	1冊	写本	明治天皇紀		宮	○	
	28	「岩倉公爵家文書 五」	1冊	写本	明治天皇紀		宮	○	
	29	「岩倉公爵家文書 補遺」	1冊	写本	明治天皇紀	詔勅、公文、合書、皇族書翰	宮	○	
	30	「大隈外務大臣時代 條約改正日誌(完)」	1冊	写本	貴族院		貴		○
	31	「榎本外務大臣在職中條約改正ニ関スル処理沿革」	1冊	写本	研究		一般野紙		
	32	「梅田又次郎『條約改正論』」	1冊	写本	研究	原本は明治26年刊行、大倉書店、序文星亨、全199頁	一般野紙		
	33	「自明治四十四年至明治四十五年 日英通商航海條約改訂一件」	1冊	写本	(明治天皇紀)		宮		
	34	「陸奥宗光書翰（伊藤博文宛） 一」	1冊	写本			一般・臨・東洋経済	○	
	35	「陸奥宗光書翰（伊藤博文其他宛） 二」	1冊	写本			一般・臨・春	○	
	36	「井上馨書翰 一」（伊藤公爵家文書）	1冊	写本			臨・一般・春	○	
	37	「井上馨書翰 二」（伊藤公爵家文書）	1冊	写本・タイプ			臨・朝・宮・貴	○	
38	「伊藤博文書翰 一」		貸出中	未調査					
39	「伊藤博文書翰 二」		貸出中	未調査					
40	「三條実美書翰」	1冊	写本	(明治天皇紀)				○	
41	「大山公爵家文書」（伊藤博文書翰）	1冊	写本	(明治天皇紀)				○	
3	42	「三條公爵家文書 一」	1冊	写本	(明治天皇紀・伊藤伝)		臨・春	○	
	43	「三條公爵家文書 二」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	旧カード目録2部同封	臨	○	○
	44	「伊東巳代治書翰 一」	1冊	写本	(明治天皇紀)		臨・一般・宮	○	
	45	「伊東巳代治書翰 二」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・貴族院)		貴・臨・宮	○	
	46	「山縣有朋書翰」		貸出中	未調査				

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版日録	田カード目録有無
	47	「岩倉具視書翰 一」	1冊	写本	(明治天皇紀・研究)		深・一 般・臨・宮	○	
	48	「岩倉具視書翰 二(伊藤公爵家文書の分)」	1冊	写本・タイプ				○	
	49	「松方正義書翰(附「実記」)」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・伊藤伝)	「松方正義関係文書」要照合	臨・春・ 一般	○	
	50	「諸家書翰類 一」		貸出中	未調査				
	51	「諸家書翰類 二」		貸出中	未調査				
	52	「諸家書翰類 三」		貸出中	未調査				
	53	「諸家書翰類 四」		貸出中	未調査				
	54	「諸家書翰抄」		貸出中	未調査				
	55	「軍事関係史料雑纂」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨・陸軍	○	
	56	「小宮氏蒐集 伊藤公伝資料」	1冊	写本・タイプ	伊藤伝	287と同一	春秋	○	
	57	「陸奥伯爵家文書 一」	1冊	写本	(研究)	「松方正義関係文書」要照合・1~126頁	一般		
	58	「陸奥伯爵家文書 二」	1冊	写本	(研究)	明治24年8月第一内閣規約他1~117頁	一般		
	59	「桂公爵家文書 一」		貸出中	未調査	明治33年7/31付「北清事変ニ関スル聖旨ノ件」他			
	60	「桂公爵家文書 二」		貸出中	未調査	明治37年1/4「武士提刀ノ談判時代勅告」他			
	61	「桂公爵家文書 三」		貸出中	未調査	明治39年1/1「山縣伊三郎入閣ニ関スル件」他			
	62	「桂公爵家文書 四」		貸出中	未調査	明治42年1/12「伊太利震災見舞状問題」他			
	63	「桂公爵家文書 五」		貸出中	未調査	明治44年1/3「御沙汰書草案ノ件」(平田東助)他			
4	64	「元田男爵家文書目次」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	「深谷編修官補採録」・「深谷編修官補本」書込	臨		
	65	「本邦ニ於ケル最恵国約款ノ沿革」編者川島領事官補職	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨		
	66	「愛知愛媛山ノ三縣下 資料蒐集並製譜調査報告書」	1冊	写本	明治天皇紀	渡辺(幾治郎)文庫の印あり	臨・渡辺		
	67	「士族族譜処分の沿革」	1冊	写本	(明治天皇紀・研究「華士族族譜処分の研究」)	朱書「参照」書込	臨		
	68	「教導職関係資料 一」	1冊	写本	神道	「宣教使心得書」大教要旨他	神宮司序		
	69	「参考資料調査控 自明治二十三年至明治二十四年」	1冊	写本	明治天皇紀	付箋多数・「深谷編修官補」書込	臨		
	70	「参考資料調査控 二 自明治廿二年至同廿四年」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀		臨		
	71	「参考資料調査控 三 自明治廿五年至同廿六年 自同廿九年至同卅一年」	1冊	写本	明治天皇紀	宮内省原稿用紙1枚同封(メモ)	臨		
	72	「参考資料調査控 自明治二十一年至明治二十二年」	1冊	写本	明治天皇紀	「深谷」書込	臨		
	73	「法律取調委員会ニ関スル調査書類」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	原稿12枚同封	臨		
	74	「桂太郎自伝 三」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	隈板内閣成立前後の事情、平凡社『桂太郎自伝』参照、憲政資料室所蔵	臨		○
	75	「住吉神社調査書」	1冊	写本・タイプ	神道		国学院		
	76	「吉田家本 古事記 上巻」	1冊	謄写版	神道	吉田子爵所蔵、昭和18年5月神道書頒布会			
	77	「明治天皇紀稿本 謄修編集会議決定事項 自昭和八年六月一日至昭和八年十二月十三日」	1冊	タイプ・謄写版	明治天皇紀	内容は昭和6年6/1~同8年11/13	臨		
	78	「明治天皇紀第四次稿本【緒言】」	1冊	写本	明治天皇紀	本文並ニ上野編修官注・大正13年	臨		
	79	「明治天皇紀稿本 明治十七年 全」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	1~256頁	臨		
	80	「明治天皇紀稿本 明治二十七年七月」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	1~43頁	臨		
	81	「明治天皇紀稿本 明治二十八年四月」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	クリップ1ヶ	臨・宮		
	82	「公刊明治天皇紀草稿 第三編 御社年時代上」	1冊	写本	明治天皇紀	1~195頁	宮		
	83	「公刊明治天皇紀草稿 第四編 御社年時代下二」	1冊	写本	明治天皇紀	1~251頁	宮		
	84	「神祇官勘文 全」	1冊	謄写版	神道	神道書頒布会、昭和16年3/14、華族前田利嗣蔵書			

深谷博治蔵文書の研究（荒船）

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版目録	旧カード目録有無
	85	「大神宮故事類纂 祭典部 其ノ一」	1冊	写本	神道	1～34頁	一般		
	86	「御逸事 二録」	1冊	写本	明治天皇紀		臨		
	87	「神宮司庁 祭典課目誌」	1冊	写本	神道		神宮司庁		
5	88	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 一」(一般的経過)	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		宮		
	89	「青木外務大臣 條約改正に関するメモランダム」(附各回公使への書翰)	1冊	写本			一般・宮		
	90	「小村外務大臣時代 條約改正史料」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨		
	91	「明治天皇御元服記」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀		臨		
	92	「元田水孚書翰」	1冊	写本	(明治天皇紀)		臨・一般		○
	93	「條約ノ効力及ヒ癸案」	1冊	写本	貴族院	黒田清隆遺文の一つ、昭和17年9月	貴		○
	94	「河瀬真孝意見書取」	1冊	写本	貴族院	條約改正意見陳述書取(黒田伯爵家所蔵文書)、昭和17年10月12日	貴		○
	95	「條約勸行論(完) 東京日日新聞文庫(日報社)」	1冊	写本	貴族院		一般		○
	96	「開拓次官黒田清隆 外国人内地旅行二回スル上申書」明治七年六月十七日	1冊	写本	貴族院	昭和17年9月17日	貴		○
	97	「條約癸案論」	1冊	写本	貴族院	明治22年刊行カ、昭和17年8月22日			○
	98	「條約締結儀と帝國議會との關係を論ず」大隈侯爵家蔵書類	1冊	写本	(研究)	原本は早稲田大学図書館所蔵	一般		○
	99	「韓国内政改革ニ関スル交渉雜件 一」	1冊	写本			臨・一般		
	100	「韓国内政改革ニ関スル交渉雜件 二A」	1冊	写本・タイプ			臨		
	101	「韓国内政改革ニ関スル交渉雜件 二B」	1冊	写本		第一巻第一号～十号	宮		
	102	「韓国内政改革ニ関スル交渉雜件 三」	1冊	写本		第十一号～十五号	臨		
	103	「韓国内政改革ニ関スル交渉雜件 四」	1冊	写本		第十六号他	臨・宮		
	104	「神宮教院資料 一」(神宮司庁公文類纂)	1冊	写本	神道・浦田	「昭和十八年六月五日(土)呈出 明治六年自二月至三月神宮教院資料」	神宮司庁		
	105	「神宮教院資料 二」(神宮司庁公文類纂)	1冊	写本	神道・浦田		神宮司庁		
	106	「神宮教院関係資料」	1冊	写本	神道		神宮司庁		
	107	「神宮司庁公文類纂(法制篇・教導篇)」	1冊	写本	神道		神宮司庁		
	108	「神教組織物語 上」	1冊	謄写版	神道	神祇院教務局			
	109	「神教組織物語 中」	1冊	謄写版	神道	神祇院教務局			
	110	「神教組織物語 下」	1冊	謄写版	神道	神祇院教務局			
	111	「浦田長民家文書 芳村正業書翰 一」	1冊	写本	浦田	明治5年1月～同6年12月	神宮司庁		
	112	「浦田長民家文書 芳村正業書翰 二」	1冊	写本	浦田	明治7年1月～同8年9月	神宮司庁		
	113	「浦田長民家文書 芳村正業書翰 三」	1冊	写本	浦田	明治8年10月～12月	神宮司庁		
	114	「浦田長民家文書 芳村正業書翰 四」	1冊	写本	浦田	明治9年1月～7月	神宮司庁		
6	115	「華士族関係新聞記事 一」	1冊	写本	(研究・「華士族秩祿処分の研究」)	東京日日新聞 明治7年1月～6月分	宮		
	116	「華士族関係新聞記事 二」	1冊	写本	(研究・「華士族秩祿処分の研究」)	東京日日新聞 明治7年7月～明治8年2月分	宮		
	117	「華士族関係新聞記事 三」	1冊	写本	(研究・「華士族秩祿処分の研究」)	郵便報知新聞 明治7年7/2～12/7分	一般		
	118	「華士族関係新聞記事 四」	1冊	写本	(研究・「華士族秩祿処分の研究」)	朝野新聞 明治7年10/8～明治8年3/19分	一般		
	119	「華士族関係新聞記事 五」	1冊	写本	(研究・「華士族秩祿処分の研究」)	朝野新聞 明治8年4/7～6/17分	一般・朝		
	120	「華族令制定五爵設定の理由考」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	(明治天皇紀・研究・「華士族秩祿処分の研究」)	昭和7年5/2	宮		
	121	「明治九年の爵位問題(未完稿)」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	(研究)	尾佐竹猛編「明治文化の研究」書物展覧社 1934年参照	一般		
	122	「今上(裕仁)天皇傳草稿 四」	1冊	自筆原稿	(研究)		一般		
	123	「今上(裕仁)天皇傳草稿 五」	1冊	自筆原稿	(研究)		一般		

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版目録	旧カード目録有無
	124	「常備長官日記 一」	1冊	写本	神道	文久3年3月~4月	神宮司庁		
	125	「常備長官日記 二」	1冊	写本	神道	文久3年4月~5月	神宮司庁		
	126	「貴族院上奏憲法上ノ疑義ニ関スル審査報告」(伊東巳代治)	1冊	写本・タイプ	貴族院				○
	127	「伊東巳代治伯遺稿『憲法正義』に関する美濃部博士の講演速記録」	1冊	タイプ・謄写版	憲法史	昭和16年4月19日於華族会館			
	128	「告文と憲法発布勅語と上諭とに就いて」尾佐竹猛博士講演速記	1冊	タイプ・謄写版	憲法史	昭和16年3月19日於華族会館			
	129	「伊藤博文 御下問奉答書 明治四十年」	1冊	写本	(明治天皇紀)	69~84頁	宮		
	130	「任免関係史料」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	内容は明治28年分	宮・臨		
	131	「日清戦争軍事関係史料雑纂」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨・宮		
	132	「孝明天皇紀写 卷一九八」	1冊	写本	(明治天皇紀)	「孝明天皇紀」参照	臨・宮		
	133	「皇親録(抄)」	1冊	写本	明治天皇紀		臨		
	134	「浦田文書 神宮御改正関係書類」	1冊	写本	浦田		神宮司庁		
	135	「祈年祭其他諸祭典資料」	1冊	写本	神道		神宮司庁		
	136	「明治初年教化運動資料」	1冊	写本	神道		神宮司庁		
	137	「教導職関係資料 一」	1冊	写本	神道		神宮司庁		
	138	「自明治十五年至卅一年 資料参考図書目録」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨		
	139	「西樞密顧問官談話・概要」黒田伯爵家文書	1冊	写本	貴族院	明治三十年四月二十九日露国外交問題三種、「黒田清隆関係文書」並に327と要検討	貴		○
	140	「憲法史研究会関係史料」	3冊	タイプ・謄写版	憲法史				
7	141	「公文雑纂 二」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	明治28年外務省関係	臨・宮		
	142	「守重卿家牒 二」	1冊	写本	神道	文久元年8月~10月	神宮司庁		
	143	「第一次松方内閣の政務部について」(深谷博治先生原稿)	1冊	タイプ	研究・明治文化研究会	尾佐竹猛編「明治文化の新研究」収録、明治文化研究会講演の草稿「内閣の興隆権限法」	宮・春・一般		
	144	「家禄賞典録処理沿革」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	(研究・「初期議会条約改正」)		一般		
	145	「條約改正問題における因権理想」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	研究	文部省日本語振興委員会歴史学部会研究発表原稿、昭和17年6月26日	一般		
	146	「伊藤博文の官民調和思想」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	研究	1936年、陸奥小太郎	一般		
	147	「明治二十五年伊藤博文の政党組織問題」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	研究・明治文化研究会	第一次草稿、明治文化研究会講演「伊藤博文の新党組織問題」カ	深谷・宮・一般・朝日・臨		
	148	「近代日本政治力の動向」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	研究	早大新聞原稿、昭和18年2月24日	一般		
	149	「三上参次講演 版籍奉還に関する一考察」	1冊	タイプ	その他		臨・朝・明治神宮・一般		
	150	「眞觀明治史 明治の鴻業と日本精神」(深谷博治先生ラジオ放送)	1冊	タイプ	研究		一般		
	151	「伊藤博文傳」(深谷博治先生ラジオ放送)	1冊	自筆原稿	研究		一般		
	152	「西園寺公望傳」(深谷博治先生ラジオ放送)	1冊	自筆原稿	研究		一般		
	153	「人見一太郎 條約締結及改正の歴史(下巻)」	1冊	写本	(研究・「初期議会条約改正」)		一般		
	154	「中田敬義氏述 日清戦争ノ前後」	1冊	タイプ・謄写版	憲政史・伊藤伝・(陸奥伝)	「昭和十三年十月 特輯第一号 中田敬義氏述 日清戦争ノ前後 秘外務省調査部第一課」			
	155	「諸願建白録(馬術保存の・神宮典札の件)」	1冊	写本	(明治天皇紀・神道)				
	156	「阿太概覽(外務省記)抄」	1冊	写本			臨・朝・一般		
	157	「伊藤博文外交及憲法意見草稿」	1冊	写本	(明治天皇紀・伊藤伝)	明治四年のもの、昭和13・4年頃末松家より借用	一般		○
	158	末松謙澄「伊藤公の欣州に於ける憲法取調願末」	1冊	タイプ	(明治天皇紀・伊藤伝)	1~24頁、「国家学会雑誌」(大正元年12月)			
	159	「秘書類纂日清事件 馬関談判 会見要録」	1冊	タイプ・謄写版	伊藤伝	「春歌公追頌會」印あり			

深谷博治旧蔵文書の研究 (荒船)

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版目録	旧カード目録有無
	160	「聖徳記念絵画館書題説明 十八 皇后冊立」	1冊	写本	(明治天皇紀)		臨		
	161	「岩倉公実記摘要 A」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨・朝	○	
	162	「岩倉公実記摘要 B」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨・朝	○	
	163	「明治天皇紀史料摘要 明治二十七年 第一号」	1冊	写本	明治天皇紀・(陸奥伝)		臨		
	164	「明治天皇紀史料摘要抄 自明治十五年至明治三十年」	1冊	写本	明治天皇紀・(陸奥伝)		臨		
	165	「官報摘録 附：法令全書(抄)」	1冊	活版・貼付	明治天皇紀	宮廷録事、勅令・詔勅、官庁彙報、叙任及辞令、他	臨・朝		
	166	「皇室祭祀資料」	1冊	写本	明治天皇紀		祭祀要綱		
	167	「明治五六年度の華士族秩禄処分問題」(深谷博治先生原稿)	1冊	タイプ・謄写版	(研究・「華士族秩禄処分の研究」)	「昭和十一年下流」書込			
	168	「伊藤博文年譜」	1冊	タイプ・謄写版	伊藤伝				
8	169	「青木外務大臣在職中 條約改正記事」	1冊	写本	(明治天皇紀・「初期議會条約改正」)	1939年6月28日写す	一般		○
	170	清沢潤論文「獄中における陸奥宗光」	1冊	写本	(貴族院)	刑務協会発行「月刊刑法」(第55号第7号所載)より	貴		
	171	「春歌公逸事」	1冊	写本・タイプ	伊藤伝	1～68頁	春歌		
	172	「寺島宗則年譜並略歴」	1冊	写本・タイプ	寺島伝	朝日新聞社原稿用紙1枚同封	一般		
	173	「陸奥宗光関係新聞記事」	1冊	写本	研究	東京日日新聞 明治16年～18年の分、昭和9年4月下旬採集	臨	○	
	174	「陸奥宗光履歴」	1冊	写本	明治天皇紀・(陸奥伝)	臨時帝室編修局蔵「諸家履歴」抜粋	臨		
	175	「諸家履歴」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・天皇の世紀	小松宮彰仁親王、伊藤博文、西園寺公望、近衛文麿、齋藤実他		○	
	176	「陸奥伯在職中 日英條約改正記事」	1冊	写・カーボン	(研究・「初期議會条約改正」)	1～281頁	一般		○
	177	「公刊明治天皇紀草稿 第四編 御壮年時代下二」	1冊	写・自筆原稿	明治天皇紀	1～120頁	宮・臨		
	178	「公刊明治天皇紀草稿 第四編 御壮年時代下三」	1冊	写・自筆原稿	明治天皇紀	1～168頁	宮		
	179	「明治年間有名人名簿」	1冊	写本	明治天皇紀	臨時帝室編修局編修官補 中島利一郎作成		○	
	180	「井上毅書翰」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	明治15年～25年のもの			
	181	「今上(裕仁)天皇傳草稿 一」	1冊	自筆原稿	(研究)		一般		
	182	「今上(裕仁)天皇傳草稿 二」	1冊	自筆原稿	(研究)		一般		
	183	「今上(裕仁)天皇傳草稿 三」	1冊	自筆原稿	(研究)		一般		
	184	「星亨談話探聞報告書」	1冊	写本	その他	明治25年10月18日のもの	大阪		
	185	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 二」(米田之部)	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		宮・臨		
	186	「竹中龍雄 明治初年に於ける関稅政策論の展開」	1冊	写本	(研究・明治文化研究会)		一般		
	187	「幣原喜重郎 外交問題回顧談」	1冊	写本	外交史研究会		東洋經濟・朝日	○	
	188	「日本回憲按」	1冊	写本	(明治天皇紀)		一般		
	189	「詔勅写(二十通)」	1冊	写本	(明治天皇紀)		宮		
	190	「守重卿家牒 一」	1冊	写本	神道	文久3年6月～7月	神宮司庁		
	191	「參考資料調査控 自明治十八年至明治二十年」	1冊	写本	明治天皇紀		臨		
	192	「華士族家禄賞典録の処分について」(深谷博治先生原稿)	1冊	自筆原稿	(研究・「華士族秩禄処分の研究」)	1～166頁	一般		
9	193	「浦田長民家文書 芳村正乘書翰 五」	1冊	写本	浦田	明治9年8月～12月	神宮司庁		
	194	「浦田長民家文書 芳村正乘書翰 六」	1冊	写本	浦田	明治10年1月～12月	神宮司庁		
	195	「浦田長民家文書 芳村正乘書翰 七」	1冊	写本	浦田	明治11年カ	神宮司庁		
	196	「中田敬義談話 日清戦争ノ前後」	1冊	写本	(伊藤伝)	1～32頁 154と同	一般		
	197	「侍従日録抄録 一」	1冊	写本	明治天皇紀	自明治十五年至明治二十五年	臨		○
	198	「侍従日録抄録 二」	1冊	写本	明治天皇紀	自明治二十七年一月至六月	臨		
	199	「侍従日録抄録 三」	1冊	写本	明治天皇紀	自明治二十七年七月至十二月	臨		

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・白紙など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版目録	旧カード目録有無
	200	「侍従日録抄録 四」附：内禁録	1冊	写本	明治天皇紀	自明治二十八年至明治三十一年	臨		
	201	「参考資料調査控 自明治二十九年至同三十一年」	1冊	写本	明治天皇紀		臨		
	202	「明治元年法制史料 一」	1冊	写本	(明治天皇紀)	明治元年1月17日～同4月	臨		
	203	「日清戦争外交関係史料雑纂」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀)	朝日新聞社原稿用紙1枚同封	宮・臨		
	204	「防殺事件覚書」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	第一 成鏡道防殺事件、第二 黄海道防殺事件	臨		○
	205	「戊辰戦争中秘書類」	1冊	写本	(明治天皇紀)		臨		
	206	「家禄賞典禄処分法施行法案説明」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・研究)		臨		
	207	「公務書類 一」	1冊	写本・タイプ	寺島伝?	倫敦在留上野大蔵大丞書簡之写、他			
	208	「各国内政関係雑纂(韓)Ⅳ」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀)	明治27年11月1日～明治29年1月21日	宮・臨		
	209	「加藤弘之「国体新論」	1冊	写本	(明治天皇紀)		臨		○
	210	「伊沢多喜男談話筆記」	1冊	タイプ	貴族院	【伊沢多喜男関係文書】、憲政資料室所蔵、和綴79頁タイプ			○
	211	「H. フレーザー (在日英公使) 書翰」	1冊	写本	貴族院	青木周蔵宛「條約改正ニ関スル断案」	費		○
	212	森有礼稿「日本政府代議政体論」	1冊	写本・タイプ	貴族院	日本立憲政体の史的考察→森全集記載の有無	費		○
	213	「議奏雑記」	1冊	写本	明治天皇紀・(孝明天皇紀・天皇の世紀)	田松木家文書	臨		○
	214	「地方長官に対する訓示(内閣総理大臣伊藤博文)」	1冊	写本	伊藤伝カ	明治20年9月28日	熊本		○
	215	史料名不明(「当今の政治統治するの最通なる方法」)	1冊	写本		明治23年9月15日	熊本		○
	216	「家禄賞典禄処分法施行ニ関スル法律案説明書」	1冊	写本	(明治天皇紀・研究)	1～40頁 206と同一カ	宮		○
	217	「陸奥君ノ憲法論」	1冊	写本	研究		一般		
	218	「明治憲法草案」	1冊	写本	(明治天皇紀)	「草案試草」と「草案試草正文」との比較	臨		
10	219	「枢密院会議筆記」	2冊	写本	(明治天皇紀)	明治24年5月15日「新聞紙雑誌又ハ文書圖書ニ関スル件」、刊本で要確認	臨・宮		○
	220	「[[番号]日本政典]草案」	1冊	墨書・原本カ	浦田	明治初年神宮小司浦田長民			○
	221	「[国会願望之事件探偵書概略]」	1冊	写本	(研究)	内容は明治13年8月のもの、1942年1月20日早大太隈文書より筆写	一般		
	222	「諸件視察録 侍従職」	1冊	写本	明治天皇紀・(華族子弟軍事教育に関する史料)	華族子弟軍事教育に関する史料	臨		
	223	「明治初期 官制改革関係史料」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀)		臨・朝		
	224	「神宮行幸御参拝関係史料」	1冊	写本	神道・(明治天皇紀)		神宮司庁		
	225	「遼東半島還付一件」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・天皇の世紀)	自明治廿八年五月～十一月	臨・宮		
	226	「條約改正ニ付神奈川県見込書」	1冊	写本	貴族院	辛巳3月5日外務省から民部省御中(大木伯壽家文書)	費		
	227	「條約改正に関する井上外務卿内達」	1冊	写本	貴族院	明治13年5月(黒田家所蔵分)	費		○
	228	「新定條約草案」	1冊	写本	(研究・「初期議案条約改正」)	明治4年5月 外務省による條約改定のための準備取調			○
	229	「條約改正ノ件ニ関シロエスレル氏へ質問及答復」	1冊	写本	貴族院	明治22年8月(黒田家所蔵分)	費		○
	230	「遺體大使伊藤博文復命書」	1冊	写本・タイプ	貴族院	内容は1905年12月8日、深谷博治探訪1942年9月	費		○
	231	「江藤新平 国法会議案・国法私議」	1冊	タイプ	(明治天皇紀)				
	232	「黒田内閣申合書」	1冊	写本	貴族院	【黒田清隆関係文書】要参照	費		○

深谷博治旧蔵文書の研究（荒船）

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版目録	旧カード目録有無
	233	「明治交通史」	1冊	写本	(研究)	雑誌『太陽』特別号写	一般		
	234	「行幸啓関係史料雑綴」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	明治9年～同28年3月	臨		
	235	「元田永孚手記 附：明治孝節録序文」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	『元田永孚文書』と要照合	臨・一般		
	236	「伊藤博文西巡日誌」	1冊	写本	明治天皇紀・(伊藤伝)	天津條約締結前末	臨		
	237	「版籍奉還関係史料」	1冊	写本	(研究・明治天皇紀)	岩倉家書類の内、版籍奉還御処置関係、1938年3月筆写	一般		○
	238	「学院院沿革関係資料」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀		臨		
	239	「華族会館誌抄」	1冊	写本	(明治天皇紀)	明治15年1月～16年6月 『華族会館誌』要照合 深谷の執筆カ	臨		
	240	「栃木群馬埼玉三県型蹟調査報告書草稿及資料」	1冊	原本カ・写本	明治天皇紀		宮		
	241	「鈴木安藏氏 日本憲法見込案解説」	1冊	タイプ	憲政史		憲政史		
	242	「伊藤博文追憶懇談会筆記」	1冊	写本	伊藤伝・貴族院	1～121頁 昭和10年10月26日、金子伯爵・栗野子爵主催	一般		
	243	「子爵日野西資博談話」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	明治天皇についての回想、「明治天皇の御日常」参照	臨		
	244	「條約改正問題一件雑綴」	1冊	写本	(明治天皇紀・研究)	「條約改正上奏案」(明治25年5月25日)他	臨		
	245	「国会議員規則」	1冊	写本・タイプ	貴族院	国会議員の選挙資格、他、全百二十章	貴		○
	246	「日清戦役前後 朝鮮関係機密外交通信(英文)」	1冊	写本	(明治天皇紀)?		一般		
	247	「曾我祐準談話筆記」	1冊	写本	(明治天皇紀)		佃遠記		
	248	「慶応三年 太政官議事所規則案」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨・国学院		
	249	「安南事件関係 外務省書類閲覧要領」	1冊	写本	(明治天皇紀)		臨		
	250	「自明治四十三年至明治四十四年 日瑞通商航海條約改修一件」	1冊			『初期議会条約改正』	宮		
	251	「東京再幸一件」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		国学院		
	252	「広島行幸啓大本營関係史料」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	明治27年10月1日～同28年5月21日	臨		
	253	「大久保利通書簡 第十八巻(第四号)」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	『大久保利通文書』『大久保利通関係文書』要確認			
	254	「大久保利通書簡 第十九巻(第四号)」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	『大久保利通文書』『大久保利通関係文書』要確認			○
	255	「広沢参議略殺関係資料」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀)	付箋多数、1929年3月25日写了、日大編「山田伯爵家文書」収録	宮・臨		
	256	「明治秘註」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	天皇の病歴を記す	宮		
	257	「伊藤家文書(侯爵西園寺公望書翰)目録」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	明治15年～同40年、「伊藤博文関係文書」「西園寺公望伝」別巻確認	臨		○
	258	「井上家川村家 文書目録」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨		
11	259	「明治十四年政変秘録 明治辛巳紀事」	1冊	活版・貼付		福沢諭吉の新聞連載記事切抜(昭和8年1月10～12日時事新報連載)			
	260	「明治天皇紀史料摘要 明治二十七年 第二号」	1冊	写本	明治天皇紀	侍従目録他 明治27年7月～10月	臨		
	261	「明治天皇紀史料摘要 明治二十七年 第三号」	1冊	写本	明治天皇紀	侍従目録他 明治27年11月～12月	臨		
	262	「明治天皇紀史料摘要 明治二十八年 第一号」	1冊	写本	明治天皇紀	侍従目録他 明治28年1月～3月	臨		
	263	「明治天皇紀史料摘要 明治二十八年 第二号」	1冊	写本	明治天皇紀	侍従目録他 明治28年4月～7月	臨		
	264	「明治天皇紀史料摘要 明治二十八年 第三号」	1冊	写本	明治天皇紀	侍従目録他 明治28年8月～12月	臨		
	265	「佐々木高行日記 上」自明治二十九年五月至明治二十九年十二月		貸出中	未調査	安在邦夫・望月雅士編『かざしの桜』参照			
	266	「佐々木高行日記 下」自明治三十三年一月至明治三十三年十二月		貸出中	未調査	安在邦夫・望月雅士編『かざしの桜』参照			
	267	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 三」(独逸国へ之部)	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・研究)		宮		

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社 目録	旧カード 目録有無
	268	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 四」 (露国之部)	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・研究)		宮		
	269	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 五」 (英国之部)	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・研究)		宮・臨		
	270	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 六」 (仏国之部)	1冊	写本	(明治天皇紀・研究)		宮		
	271	「大隈外務大臣時代 條約改正問題一件 三」 (筆写特撮本)	1冊	筆写	(明治天皇紀・研究)		臨		
	272	「明治天皇紀資料採集控」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	明治十五・十六・二十一・二十二・二十五・三十一年	臨		
	273	「政治関係史料雑纂」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・研究・天皇の世紀)	大阪	臨・宮・一般・貴		
	274	「明治四十四年 日英條約改正交渉記録」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・研究)		臨		
	275	「新聞記事雑纂 一」	1冊	写本	(明治天皇紀)	明治4年5月～同22年8月20日	臨・宮・一般		
	276	「新聞記事雑纂 二」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・天皇の世紀)	明治22年8月 東京日日新聞論説「條約改正ニ関スル意見」、昭和十二年近衛内閣成立関係の新聞同封	臨・宮・朝・一般		
	277	「社会経済関係史料雑纂」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・伊藤伝・貴族院・天皇の世紀)		春・貴・臨・一般		
	278	「清国革命動乱関係外交文書」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)		臨		○
	279	「皇太后宮職日記抄 その他」	1冊	写本	明治天皇紀	明治28年中心	臨・朝	○	
	280	「皇后宮職日記抄 その他」	1冊	写本	明治天皇紀	明治28年中心	臨・朝	○	
	281	「秘書類纂写」(外交篇)	1冊	写本		出版案内パンフレット同封・「秘書類纂 外交篇」原書房と比較			
	282	「小宮氏蒐集 伊藤公傳資料」	1冊	タイプ・(写本)	伊藤伝	1～150頁 56と重複	春紙		
	283	「樞密外務大臣在職中 條約改正に関する處理沿革」	1冊	写本	(研究・「初期議會案約改正」)		一般		○
	284	「山縣有朋書簡 第二十三卷(第二号)」		貸出中	未調査				
	285	「山縣有朋書簡 第二十一卷(第三号)」		貸出中	未調査				
	286	「御巡幸神宮御参拜一件 神宮司庁公文雑纂 祭儀篇」	1冊	写本	明治天皇紀(・神道・浦田)		神宮司庁		○
	287	「神宮関係資料」	1冊	写本	神道	文久元年の記事	神宮司庁		
12	288	「自明治卅二年至全四十五年 詔勅集」	1冊	写本	明治天皇紀	旧カード目録と内容異なる	臨		○
	289	「遣韓大使伊藤博文復命書」	1冊	写本・タイプ	伊藤伝・研究	238と同じカ、近代日本史研究会「近代日本史研究」1～5号に複製	臨		○
	290	「明治天皇紀稿本目次」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	明治十六・二十・二十二・二十六・三十一年			
	291	「主殿寮日録抄 上」自明治二十七年正月 至明治二十八年七月	1冊	写本	明治天皇紀		臨		
	292	「主殿寮日録抄 下」自明治二十八年八月 至明治二十八年十二月	1冊	写本	明治天皇紀		臨		
	293	「徳大寺実則日記 抄」	1冊	写本	明治天皇紀	明治18年3月～同30年10月	臨		
	294	「公文雑纂 一」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	明治25年5月11日～同28年11月5日	臨・宮		
	295	「大津事件関係資料 下」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)	1～177頁 373とセット	臨・宮		
	296	「伊藤家文書 伯爵陸奥宗光書簡」	1冊	写本	(伊藤伝)	ボールペン・カーボン			
	297	「明治天皇御伝記史料抄」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	昭和10年12月15～16日	宮・臨・朝	○	
	298	「徳大寺実則書翰」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		朝・宮・臨・春	○	○
	299	「公文録・公文別録」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・朝	○	○
	300	「京城日報所載 伊藤博文公実歴談」	1冊	写本・タイプ	伊藤伝			○	○
	301	「明治天皇紀稿本抜書及草稿」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・宮・朝・一般		
	302	「明治天皇御幼少時側近者日記 抄」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・朝	○	



深谷博治旧蔵文書の研究（荒船）

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞 社版目録	田カード 目録有無
	303	「内外人履歴等雑纂」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・宮・朝	○	
	304	「宮内省諸記録雑纂 上」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・朝	○	
	305	「宮内省諸記録雑纂 中」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・宮・朝	○	
	306	「宮内省諸記録雑纂 下」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・宮・朝	○	
	307	「内廷関係記録雑纂」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・朝	○	
	308	「朝鮮事件関係史料雑纂」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀・朝鮮)		臨・朝・一般	○	
	309	「秘書類纂 朝鮮交渉一」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・天皇の世紀・朝鮮)	【秘書類纂】要確認	臨	○	
	310	「秘書類纂 朝鮮交渉二」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀・朝鮮)	【秘書類纂】要確認	臨・宮・朝	○	
	311	「公文類聚 一」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・宮・朝	○	
13	312	「公文類聚 二」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨・宮・朝	○	
	313	「公文類聚 三」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)		臨	○	
	314	「内大臣府文書 一」	1冊	写本	明治天皇紀	1～51頁 元老院国憲草案	臨		
	315	「内大臣府文書 二」	1冊	タイプ	明治天皇紀	1～29頁 元老院国憲草案313のタイプ版	臨		
	316	「内大臣府文書 三」	1冊	写本	明治天皇紀	日本国憲見込案	臨		
	317	「内大臣府文書 四」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	第一次大隈内閣内閣大臣辞表(明治31年)	臨・宮・内閣・朝		
	318	「内大臣府文書 五」	1冊	写本	明治天皇紀	典仁親王(其他)御追尊書類	宮		
	319	「内大臣府文書 六」	1冊	写本	明治天皇紀・「初期議会条約改正」	岩倉大使寺島外務卿時代 條約改正関係資料	臨		
	320	「内大臣府文書 七」	1冊		明治天皇紀・「初期議会条約改正」	井上外務大臣時代 條約改正関係資料			
	321	「内大臣府文書 八」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	防毅令事件関係資料	臨		
	322	「内大臣府文書 九」	1冊	写本	明治天皇紀	1～86頁 朝鮮及台湾関係書類	宮		
	323	「内大臣府文書 十」	1冊	写本	明治天皇紀	台湾受渡二閣スル書類	宮		
	324	「内大臣府文書 十一」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	青木公使独逸皇帝陛下ニ謁見記事	臨・宮		
	325	「内大臣府文書 十二」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	韓国特派大使伊藤博文復命書238・289と要比較	臨		
	326	「内大臣府文書 十三」	1冊	写本	明治天皇紀	西徳二郎 外交関係談話の概要、139と要検討	臨		
	327	「内大臣府文書 十四」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	トルコ軍艦遭難関係資料	臨		
	328	「内大臣府文書 十五」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	皇室関係資料	臨・朝	○	
	329	「内大臣府文書 十六」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	議会関係資料、「秘書類纂」要比較	臨・宮・朝	○	
	330	「内大臣府文書 十七」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	内政関係資料、「秘書類纂」要比較	臨		
	331	「内大臣府文書 十八」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	外交関係資料、「秘書類纂」要比較	臨・宮・朝	○	
	332	「内大臣府文書 十九」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	軍事関係資料、「秘書類纂」要比較	臨・宮・朝	○	
	333	「内大臣府文書 二十」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	神宮式年御造營二閣スル書類一部欠損	臨・朝	○	
	334	「内大臣府文書 二十一」	1冊	貸出中・未調査	明治天皇紀	徳大寺侍従長宛書翰			
	335	「内大臣府文書 二十二」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	侍従各地巡視復命書 一	臨・朝	○	
	336	「内大臣府文書 二十三」	1冊	写本	明治天皇紀・(天皇の世紀)	侍従各地巡視復命書 二	宮	○	

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社復旧日録	旧カード目録有無
14	337	「内大臣府文書 二十四」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	侍従各地巡視復命書 三	臨・宮・朝	○	
	338	「内大臣府文書 二十五」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	侍従各地巡視復命書 四	臨・朝	○	
	339	「内大臣府文書 二十六」	1冊	写本	明治天皇紀	京都府管下宗教事情	宮		
	340	「内大臣府文書 二十七」	1冊	写本	明治天皇紀	関紀暗殺事件被告人訊問調書一	臨		
	341	「内大臣府文書 二十八」	1冊	写本	明治天皇紀	関紀暗殺事件被告人訊問調書二	臨		
	342	「内大臣府文書 二十九」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	関紀謀殺及兇徒聚衆事件並故殺事件予審終結決定書	臨・宮		
	343	「内大臣府文書 三十」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	都筑馨六「王位論」	臨		
	344	「内大臣府文書 三十一」	1冊	写本	明治天皇紀	「日本名臣言行録」米国人查列斯蘭貴編述 宮崎駿児訳述	臨		
	345	「内大臣府文書 三十二」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	依仁親王調査 姓名ノ由来	臨・宮		
	346	「内大臣府文書 三十三」	1冊	写本	明治天皇紀	坂本則美 不得已論	臨		
	347	「内大臣府文書 三十四」	1冊	写本	明治天皇紀	195~246頁 丁刀乱概	宮		
	348	「内大臣府文書 三十五」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀・(天皇の世紀)	拾遺	臨・宮・朝	○	
	349	「内大臣府文書 三十六」	1冊	写本	明治天皇紀	明治天皇内廷御書類目録 一	宮		
	350	「内大臣府文書 三十七」	1冊	写本	明治天皇紀	明治天皇内廷御書類目録 二	宮		
	351	「内大臣府文書 三十八」	1冊	写本・タイプ	明治天皇紀	内大臣府文書目次	臨		
	352	「内大臣府文書 三十九」	1冊		明治天皇紀	明治天皇御手許書類史料採集控			○
	353	「日本国憲見込案」(土佐立志社憲法草案)	1冊	別置	未調査	316と同じ、分類は貴族院			
	354	「外務省資料」明治神宮奉賛会	1冊	タイプ・原本	(明治天皇紀)	條約改正□□□[不明] 会始未上申案	外務・明治神宮・一般		
	355	「皇室祭所史料」自明治元年至明治五年 年表	1冊	写本	(明治天皇紀)	新聞記事「津田敬武「[祭政一致]と我団体 1~5(完)」同封	祭祀要綱		
	356	「明治初年華士族の経済方面研究」研究の趣旨・概要 (深谷博治先生原稿)	2冊	タイプ	研究・「華士族秩禄処分」の研究				○
357	「参考資料調査控」自明治十五年至明治十七年	1冊	写本	明治天皇紀					
358	「葡国公使提出ノ覚書ニ対スル答弁書」(黒田伯爵家文書)	1冊	写本・タイプ	貴族院		貴		○	
359	「大久保利通書簡 第二十巻(第三巻)」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀)					
360	史料名不明(神道関係)	1冊	写本	(浦田)	宜教師心得書、大教要旨など、内容は明治4~6年	国学院			
361	「社家 慶応二年二月一日」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・神道)					
362	「社家 慶応二年二月一日」	1冊	写本・タイプ	(神道)	361と同一	国学院			
363	「天神地祇拾三千一百廿二座」	1冊	謄写版	(神道)	神道関係の史料(神社祭神の一覧)、神宮文庫の印あり				
364	「一廣雜事 八所御霊之内鎮座又豊後国鏡宮是也」	1冊	謄写版	(神道)	神道関係の史料(神社祭神の一覧)、神宮文庫の印あり				
365	「[[史料・天皇の世紀]出版企画試案]他(深谷博治先生原稿)」	3冊	自筆原稿	天皇の世紀・寺島伝	1冊「[[史料・天皇の世紀]出版企画試案」、2冊「寺島宗則伝草稿」	朝・一般・貴・早高			
15	366	「深谷博治先生原稿」	5点(うち2冊)	自筆原稿	寺島伝		一般・早高		
	367	「朝鮮事件 抄」上・下(二冊)	2冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・天皇の世紀)	2冊は同一内容。1冊はそれをタイプしたもの。	臨・宮・朝	○	
	368	「米布併合一件」(「米布併合一件 一 米布併合一件調査要綱」、「米布併合一件 二」、「米布併合一件 第四巻(抄)」、「米布併合一件 三 米布併合一件 第五巻(抄)」、「米布併合一件 四 米布併合一件 第六巻・第七巻(抄)」、「米布併合一件 五 米布併合一件 第八巻(抄)(米布併合史)」)	5冊	写本	(明治天皇紀)	カードは各写本に1枚ずつ同封	宮		○
	369	「明治十五年 朝鮮事變始末」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀)		臨・朝	○	

深谷博治旧蔵文書の研究 (荒船)

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞 朝日版 朝日版 朝日版	旧カード 旧カード 旧カード 旧カード	目録 目録 目録 目録	有無
	370	「外交関係史料雑纂」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・天皇の世紀)		臨・朝・一般				
	371	「諸家日記 抄」	1冊	写本	(明治天皇紀・天皇の世紀)	未記入カード2枚同封	臨・朝・一般	○			
	372	「條約改正関係史料雑纂」	1冊	写本・タイプ	(明治天皇紀・天皇の世紀)	未記入カード1枚同封	一般・臨・費・春	○			
	373	「大津事件関係資料 上」	1冊	写本	明治天皇紀	295とセット	臨・宮			○	
	374	「陸奥宗光伝関係書類」	数十枚	写本・活版	陸奥伝	深谷宛陸奥広吉書簡1通冊子1冊(高橋是清翁をおもふ)同封	一般・宮			○	
	375	「未整理 明治期文書 一」	数十点	写本・タイプ	(明治天皇紀他)	未松家文書など、「未松子爵家田蔵文書」と要照合	臨・宮・一般・春				
	376	「未整理 明治期文書 二」	40点	写本・タイプ	明治天皇紀	伊藤博文文書、陸奥伯爵家文書など	臨				
	377	「未整理 明治期文書 三」	13点	写本・タイプ	明治天皇紀	伊藤公爵家文書、華族会館誌など、華族関係、秩父電鉄パンフ「秩父の神社三社巡拝」1枚同封	臨				
	378	「未整理 明治期文書 四」	9点	写本・タイプ	明治天皇紀	未松宛諸家來簡(未松子爵家田蔵文書)2冊・板垣退助意見書1点・伊藤宛伊東巳代治書簡5点・伊藤宛桂太郎書簡集	臨				
	379	「未整理 明治期文書 五」	4点	タイプ	明治天皇紀	伊藤宛西園寺公望書簡集・伊藤宛徳大寺実明書簡集・未松宛諸家來簡集2冊(未松子爵家田蔵文書)					
	380	「條約改正関係史料」	8点	写本・タイプ	(明治天皇紀)	「上奏案」・「條約改正問題一件 米田之部」・「本邦ニ於ケル領事裁判權撤去始末」・「第四章 大隈時代(明治二十一、二年)」他	臨・一般・宮				
	381	「陸奥家関係史料」	大量	写真他	陸奥伝	明治24年8月内閣規約、その他、陸奥家写真多数、深谷宛陸奥広吉書簡2通					
	382	「尾佐竹猛著作及論文目録」他	3点	騰写版他	研究	尾佐竹猛著作目録2点・深谷宛西田長寿書翰1通(尾佐竹猛全集著作目録について)					
	383	「陸奥宗光傳草稿」(深谷博治先生原稿)	3点	自筆原稿	陸奥伝		一般				
	384	「明治史研究会創立趣意書」断片 他	3点	騰写版	明治史研究会	趣意書1枚・「幕末外交文書通信全覧刊行趣旨内容見本」パンフ(活版)・深谷自筆原稿断片「維新時代と階級之撤廃」				○	
	385	「新聞切抜」	大量	活版	未調査	昭和初期の新聞記事(明治期の人物関連のもの中心)封筒入					
	386	「雑件」	5点	写本・印刷物	(明治天皇紀他)	選挙公報(昭和12年4月30日)・「帝國議會開設ニ関スル史料陳列目録 於貴族院予算委員室」2部・明治天皇紀関係資料5枚・写本「明治大正史政治篇目次 野村秀雄(議會開設前分)」	活版・臨・宮				
	387	「明治天皇錦吟目録 全」(昭和三十八年十一月 村上派吉氏奉納 明治神宮) 他	原稿束	未調査	その他	他=目録(1~34頁)、維新前後関係書目 凡例含め12枚	一般・朝・祝典				
	388	「未整理 明治期文書 六」	原稿束	写本	(明治天皇紀)	太政官日誌(明治七年第五百一十一号) 他	宮・臨			○	
16	389	The Kagoshima Affair A chapter of Japanese History	36枚	写真版	(研究)	藤井其太郎氏洋行中に採集のもの					
	390	実物史料「上野景範書翰」	1点		(寺島伝)	寺島宗則宛 明治8年1月28日					
	391	実物史料「寺島宗則宛書翰 二通」	2点		(寺島伝)	吉田清成より1通、本郷一郎より1通					
	392	実物史料「青木周蔵書翰」	1点		(寺島伝)	寺島宗則宛 明治6年8月23日					
	393	実物史料「金子堅太郎書翰 二通」	2点		(寺島伝)	いずれも寺島宗則宛(消印より) 明治15年3月16日と年代不明11月28日					
	394	実物史料「吉田清成上申書」	2点		(寺島伝)	寺島宗則外務卿宛 明治11年4月6日					

箱	史料 番号	文書・簿冊名	数量 (冊)	写本・原文 書・白筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞 社版目録	旧カード 目録有無
	395	実物史料「岡本検事上申書 二通」	2点		(その他)	いずれも大木司法卿宛、明治16年4月5日(高田事件容疑者捕縛及び尋問の状況について)、明治16年4月10日(高田事件について証拠不十分で釈放せんとするも県令の要請によりなお5、6日延期するか否か)			
	396	実物史料「露国特命全權公使スツルウエ書翰」	1点		(寺島伝)	寺島宗則宛 明治12年9月13日			
	397	実物史料「井上毅書翰」	1点		(寺島伝)	寺島宗則樞密院副議長宛 明治22年5月8日 裁判所構成法諮詢に関し委員の決定について			○
	398	実物史料「黒田清隆書翰」	1点		(寺島伝)	外務卿寺島宗則宛 明治8年12月29日 朝野新聞第702号の論説に政府の内部情報掲載されたことに付、情報管理に苦慮する内容			○
	399	実物史料「司法省組織案」	1点		(その他)	大木家文書、年月日不明			
	400	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 「消防団規則」			
	401	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	明治?年7月19日 「以後仮府兵ヲ警固方ト改メル事」			
	402	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 仮府兵廃止関係の文書			
	403	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 「役年寄人選入札」の結果一覧			
	404	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 「神祇曹ノ論至当ト存候事」			
	405	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	明治?年12月27日 民衆蜂起について触れている書翰			
	406	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	明治?年7月19日 「戸籍ヲ編製スルニ付議事」			
	407	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	408	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 河田景福より「神吉先生」宛書翰			
	409	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 河田景福より浦田長民宛書翰			
	410	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	411	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 測量についての記載			
	412	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	413	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 「度会府」よりの「府県掛弁官事」への「当府下町入用出銀儀ニ付何書」			
	414	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 神宮、神領についての記載			
	415	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 人足帳のようなもの?			
	416	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 士族に關係するもの			
	417	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	明治?年8月8日 探索書 詳細不明			
	418	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	明治?年2月30日 河田景福よりの書翰			
	419	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 詳細不明			
	420	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 詳細不明			
	421	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	2点		浦田	史料二通 度会県、仮府兵関係のもの			
	422	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 正木重也を管轄中搜索方に申し付ける度会県よりの文書			
	423	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 御一新のため年寄の称号廃止のこと			
	424	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 詳細不明			
	425	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	426	実物史料「民政関係 (一) 65点の中」	1点		浦田	明治2年3月4日 度会県より米などの請求			

深谷博治旧蔵文書の研究（荒船）

箱	史料 番号	文書・簿冊名	数量 (冊)	写本・原文 書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞 社版目録	旧カード 目録有無
	427	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 帳面のようなもの			
	428	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治6年8月15日 「御一新以来奉職履歴」 神祇省七等出仕 浦田長民			
	429	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	度会県より軍務官へ仮府兵についての文書			
	430	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 人足について			
	431	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年7月4日 内容不明			
	432	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 人足帳			
	433	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 「引替所一ヶ月入用之積」			
	434	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	435	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治2年4月22日 度会県府への訴状			
	436	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 村の神楽役について			
	437	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年7月12日 河田景福より浦田宛書翰			
	438	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 書翰			
	439	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	度会県宛の書翰			
	440	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	441	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 神官に関するもの			
	442	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	443	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 土地・利子に関するもの			
	444	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	445	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 浦田宛の書翰			
	446	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 各村の人足人数の記録			
	447	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 「捕込ハ今度ノ官制ニ漏タル」			
	448	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 麦年貢の歩合について			
	449	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 宮川橋について			
	450	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 町の合併について			
	451	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 人足の働きがよくないこと			
	452	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 麦年貢のやりとり			
	453	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 町の三組の集り 上組（浦田町）、中組（曾折町）、下組（岡本町）			
	454	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	455	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	456	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 乗馬の際の規制について			
	457	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 浦田長民の書翰			
	458	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年6月15日 参拜の仕方について神祇官へ打ち合わせしたこと			
	459	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 埋葬の際の取り決め			
	460	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年6月2日 神宮家、神宮仲間の呼称変更について			
	461	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年12月13日 内容不明			
	462	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	年月日不詳 宇治山田町々諸人用割調			
	463	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年4月3日 神境の田畑の税について			
	464	実物史料「民政関係（一） 65点の中」	1点		浦田	明治？年11月17日 「羽書高七千七百両（引替高見積）」			

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞 社版目録	旧カード 目録有無
	465	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 庚申待ち等について (内容不正確)			
	466	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 町組年寄の文書			
	467	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治8年3月26日 河田景福より浦田長民宛書翰			
	468	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	元治元年9月11日 皇太神の祀りについて			
	469	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治?年5月18日 家に付きたる職掌について			
	470	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 内容不明			
	471	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 宇治町の史料			
	472	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 町組の史料			
	473	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治6年11月5日 出訴期限規則			
	474	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治?年4月8日 宇治の会合年寄について			
	475	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 町人用、麦年貢について			
	476	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治?年4月29日 「町人用兼方ノ再儀」			
	477	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 詳細不明			
	478	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	壬申正月5日 詳細不明			
	479	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 治水工事関係のもの、水路の地図あり			
	480	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治?年9月9日 実方よりの祭事についての書翰			
	481	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	明治?年11月18日 内容不明			
	482	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 詳細不明			
	483	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	宇治山田町年寄への達			
	484	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	年月日不詳 小学校建校について			
	485	実物史料「民政関係 (二) 21点の中」	1点		浦田	口上の包み紙のみ			
	486	実物史料「吉田全権大使の書翰」	1点			宛名は破損につき不明、明治?年8月7日			
	487	「明治廿三年十一月十五日刊行 倫勸新聞抄紙」	1点						
	488	「大津事件 主として明治天皇に関する方面」	1点		明治天皇紀				
	489	「明治十六年資料入レ場所無キ分」	1点						
	490	「日清戦後対韓關係 (明治二十九年三月二十日)」 他	1点		朝鮮				
	491	「大木藩任宛文書」			貴族院				
	492	「明治十五年公文録」				「紀州田辺沖ニ於テ退艦艦米因軍艦アレト号ト衝突ス」(4月18日)「土族ノ勸業資本金トシテ支出スベキ金額及ビ右資本金取扱法ヲ定ム」(6月22日)			
	493	「公文雑纂」			朝鮮	「在漢城臨時代理公使高平小五郎ヨリ報告」(明治19年4月2日)			
	494	「公文雑纂」				「帝日本議院建築ニ関スル貴衆両院書記官長ノ上申ニ対シ内務大臣伯爵井上馨意見ヲ聞申ス」(明治26年5月27日) 他			
	495	「公文雑纂」				「特旨ヲ以テ西高辻信蔵ヲ華族ニ列ス」(明治15年6月23日) 他			
	496	「黒田伯爵家文書」			伊藤新党問題	全て明治31年のもの			
	497	「井上侯爵家文書」			伊藤新党問題	伊藤博文書翰井上馨宛 (明治31年6月25日)、重複あり			
	498	「伊藤公爵家文書」			伊藤新党問題	全て明治31年のもの			
	499	「高松宮文書」			明治天皇紀	全て明治31年のもの			
	500	「内大臣府文書」	1点	写本・タイプ	明治天皇紀	「官吏ノ任用ニ関シ候爵須賀茂韶意見」(明治31年7月4日)	臨		

深谷博治旧蔵文書の研究（荒船）

箱	史料番号	文書・簿冊名	数量(冊)	写本・原文書・自筆など	組織・分類	備考	用紙	朝日新聞社版目録	旧カード目録有無
	501	「徳大寺実則日記」	2枚	写本	明治天皇紀	「韓国王親書ヲ以テ特命全權公使加藤増雄ノ留任ヲ請ハル」(明治31年8月25日)、「省ク」書込	臨		
	502	「内禁録」	2枚	写本・タイプ	明治天皇紀	「侍医桂秀馬皇太子御体承増量ノコトヲ上申ス」(明治31年6月26日)			
	503	「西郷侯爵家書簡帖(一と四の一部)」	2点	写本	伊藤新党問題	全て明治31年のもの、10/27山本権兵衛書翰・6/15黒田書翰	臨		
	504	「内大臣府文書(五十四の一部)」	1点	写本・タイプ	(明治天皇紀)	海軍軍艦秋津洲号について(明治25年)、表紙1枚と本体6点、重複あり	臨		
	505	「松方家文書」	1点	写本	(明治天皇紀)	明治31年6月18日、重複、松方冠山県書翰	臨		
	506	「徳大寺侍従長宛書翰」	2点	写本・タイプ	(明治天皇紀)	稿本史料、12/12熾仁親王書翰・7/29興東宮武官長書翰	臨		
	507	「初叙、進階規定の改定」	1点	写本・タイプ	(明治天皇紀)	(明治24年11月25日)	臨		
	508	「稿本の体裁・体例の件」	1冊	タイプ	明治天皇紀	「明治天皇紀」の表記上の注意事項集、朱書			
	509	「伊藤博文書翰」	2冊	タイプ・謄写版		25～27頁、明治31年9/13伊藤梅子宛書翰1通			
	510	「末松謙澄書翰」	1冊	タイプ・謄写版		諸家來簡			
	511	「(深谷博治先生原稿)」	1枚	自筆原稿		断片	渡辺カ		

凡例

臨 = 臨時帝室編修局用原稿用紙か同算紙または臨時編修局用算紙  
 宮 = 宮内省用算紙・同原稿用紙  
 貴 = 旧貴族院五十年史編纂掛用原稿用紙  
 春または春献 = 春政公追頒会(伊藤博文伝)用原稿用紙・同算紙  
 一般 = 一般原稿用紙(例: 榎原など)  
 東洋経済 = 東洋経済「現代日本建設者詳傳」用箋  
 深 = 深谷博治用原稿用紙  
 渡辺 = 渡辺幾治郎用原稿用紙  
 神宮司庁 = 神宮司庁用原稿用紙  
 国学院 = 国学院大学皇典講究所用紙  
 大阪 = 大阪府用紙

明治神宮 = 明治神宮奉賛会  
 祭祀要綱 = 皇室祭祀要綱原稿用紙  
 憲政史 = 憲政史編纂会用紙  
 佃速記 = 佃速記事務所原稿用紙  
 内閣 = 内閣用算紙  
 祝典 = 紀元二千六百年祝典記録編纂用原稿用紙  
 外務 = 外務省用紙  
 早高 = 第二早高雑誌部原稿用紙  
 陸軍 = 陸軍省用紙  
 熊本 = 熊本県用紙

1 備考以外で空欄となっている箇所や「?」「カ」が付されている所は整理途中である。後日再調査を期したい。

② 文書・簿冊名欄が斜体になっている史料は元の表紙(茶色ないし灰色)がついているものである。史料番号374～388については、事実上未整理状態であるため整理封筒中に各種原稿用紙やタイプ版の写本類が編綴されることなく混在している。その意味で「元の状態」である。